

山名

源矩豊

第7号

表紙裏
空白ページ

会誌「山名」第7号 目次

平成27年度山名会歴史講演会より

室町文化の歴史的意義

松本公一

1

京 応仁の乱の前と後

山本義典

19

平成28年度山名会歴史講演会より

秀吉・家康期の山名禅高

伊藤真昭

32

平成29年度山名会歴史講演会より

山名宗全の虚像と実像

呉座勇一

52

「山名」第7号発行に際して

事務局

76

平成27年山名会歴史講演会第1講

室町文化の歴史的意義

池坊短期大学教授 松本公一教授

(山名会活動記録のビデオより起稿)

講師紹介 (山名年浩会長)

山名氏の特長の一つは・・・、鎌倉・室町・江戸と三つの幕府を通して存在し得たのは、武家の中で山名氏だけなんです。そう言う中で、山名氏が果たした歴史的な意義とは何なのか、という事をハッキリさせることが、非常に大事かと思えます。

今日の最初の講師である松本公一先生は、こちら池坊短期大学の教授でいられます。同志社大学の大学院で文化史学を研究され、ご専門は日本宗教文化史、伝統文化論で御座います。

歴史学者の方のお話しは、非常に確かな史料・史実に基づいて、一体何が大事であったのかと言う点を掘り下げて頂けます。私も今回の件で数回、松本先生にお目に掛かりましたが、非常にキツチリとした方で学者として信用できるし、きつと授業も有意義な楽しい授業をなさっていると思います。それでは松本先生よろしくお願い致します。

はじめに

ただ今、過分な紹介をいただきまして、今紹介されたような形で一時間出来るかな、と、ちよつと不安になってきました。それで、私は今回は「室町文化の歴史的意義」という所でお話しをさせていただきます。

先ほどご紹介いただいたように、私は同志社大学の文学部：文化史学と言う他には無い名前の歴史学を今でも勉強しています。

文化史学と聞きますと多くの人は「文化の歴史をやっているんですね」と言うような事を言われます。実はそうではなくて、人間が作り出した物、政治であり、経済であり、宗教であり、これらは広い意味で全て文化なんです。

人間が作り出した物を対象にしながら、時代時代にどのような特徴があったのか、どういう特徴を見出せるのか、と言うのを明らかにしていこうと言う

のが文化史学でございます。

今回、山名年浩会長様との打合せの時にこんな話なら出来ると、お話しさせてもらいましたが、山名会の大会ですので、室町文化の中で山名氏はどういった事を果たしたのか、といったところをまずお話ししたいと思います。

それに引き続き、では山名氏が生きた室町時代の文化とはどういった物だったのか、ということが続けてお話しをする流れにしたいと思います。

パワーポイントも作ったのですが、私の場合、写真とか絵です。それ以外はレジュメと適宜、板書をさせていただきたいと思います。後ろの方は見にくいかも知れませんがご容赦下さい。まずレジュメの順番にお話しをしていきたいと思います。

一、山名氏の文事

第一番目に室町時代の「山名氏の文事」と言う書き方をしました。山名氏は文化的にはどういう活動をしていたのか、と言うことですね。

山名氏といえば、どうしても応仁の乱の時の山名持豊。まあ、この人が余りにも傑出して有名なわけですね。

ところが、山名氏というのは…皆さんにお話しするのは釈迦に説法ですが、室町幕府において四職の

一家であった。四職と言うのは、侍所の長官を四つの大名家で順番にやっていく訳ですね。赤松・一色・山名・京極の四家です。当然、侍所の長官と言うことは、室町將軍と近い位置にいる訳です。

山名時熙と詩歌

山名持豊以前に山名時熙という人物がいます。室町文化の中で考える時、山名時熙という人物は無視出来ない人物なんです。

今回の事で勉強させてもらい気付いたのですが『一休』という漫画の中に山名時熙が出ているんですね。それでどういう立場で出ているかと言うと、將軍と共に幕政の合議を行う宿老の一人として描かれており。それは恐らく間違いはない。

山名時熙という人は1367〜1435まで生きた人です。幕政にも活躍した人なのですが、後世のものになります。『山名氏系図』に次のような記述があります。

「時熙作詩及び倭歌を好む。其の詩歌世に伝ふ。」

と『山名系図』の時熙のところに明記されています。

『山名系図』自体が出来たのが、少し後の時代に

なるのですが、時熙と言う人物は詩歌、ここでも詩歌というのは、詩は漢詩で、歌は和歌です。

漢詩や和歌を非常に好んで、その詩は世に伝わっていたという記述があります。

この記述は非常に重要で、実際に見ていきますと、この時熙さんという人は、特に和歌については、様々な実績を認めることが出来ます。

例えば、『新統古今和歌集』を見てみると「題しらず」として源時熙（山名時熙）の

「風さゆるこの夜やいたく更けぬらん

河音すみて千鳥鳴也」

（『新統古今和歌集』巻第六）

という和歌が入っています。

『新統古今和歌集』というのは、勅撰集、勅撰集というのは天皇が命令をして、編纂をさせた和歌集なのです。

勅撰集というのは、最初は平安時代の『古今和歌集』に始まります。実は室町時代までに、二十一集、勅撰和歌集は作られていて、この『新統古今和歌集』が最後を飾る物になるのですが、そこに一首入集しております。

実は武家としては、その他何人かは入集している

のですが、やはりそこに名を残すと言うことは重要なことかと思えます。

更に山名の家というのは、意外と和歌に堪能な人が何人かいたということが分かります。例えば、『新後拾遺和歌集』という室町時代の前半に出来た二十番目の和歌集です。

その中に山名氏清の和歌が一首

「あはざりしつらさをかこつことの葉に

いまだにぬるゝに枕哉」

（『新後拾遺和歌集』巻第十三）

という和歌が入集しています。この頃の勅撰集には武家の和歌も入集しています。

本来、和歌という物は公家の物、貴族の物だったんですね。少なくとも、平安時代の和歌集には武家の和歌は、あまりありません。

例えば、鎌倉時代になりますと、鎌倉三代将軍の源実朝は個人の歌集『金槐和歌集』を作ります。

また、鎌倉時代に勅撰集に入集するのは、宮將軍となる宗尊親王の時代を待たなければなりませんでした。文永二年（一二六五）に完成した『続古今和歌集』には、宗尊親王の和歌が、編纂を命じた後嵯峨院よりも多く入集した和歌集で、この和歌集は、

武家政権たる幕府の将軍が勅撰集に関わる例をひらくものとなりました。

室町になりますと、こういった勅撰集は本来貴族文化のものであって、朝廷で天皇が命令して作らせる物なんです。が、室町時代の勅撰集としては二十番目の新後拾遺和歌集や一番最後の新統古今和歌集は、これらを編纂するに当たって、室町将軍が天皇に意見をしていくんです。

因みに『新後拾遺和歌集』の方は、足利義満が時の天皇に奏請をして編纂が始まります。最後の『新統古今和歌集』は、六代将軍の足利義教が申請をして編纂が始まるんです。ですから、そういった中で幕府の武家達の和歌も入ってくる。

それは裏を返せば、京都にいる上級武家達は和歌を詠む嗜みがなければいけなかった。そういった所から、これらの和歌集に中に入集する武家達が出てきます。

それから『新統古今和歌集』には、もう一人、源熙貴つまり山名熙貴の和歌も一首、入集しています。これは

「人めのみ忍ぶの露のおきもせず

寝もせぬ恋に乱れてぞふる」

(『新統古今和歌集』巻第十一)

という和歌ですね。

和歌は文学の分野でして、私としては和歌の善し悪しがついては答えられないのですが、冗談で良く言うんですが、学生なんかには和歌のことを聞かれても、和歌はワカらんと逃げていますね……

こういう勅撰集という非常に権威ある和歌集に入集する人物が山名の中に何人か出てくるということは、注目していいのかと思います。

話を山名時熙に戻しますが、時熙は六代将軍・足利義教の時に幕府で非常に重要な地位を占めた人物でありました。室町時代になりますと将軍達は、それぞれ自分の周囲にお気に入りであったり、実力のある者を置いて、一種のグループを形成していくわけです。そういった義教のグループの中に山名時熙は位置していたわけです。

ここに『満済准后日記』という資料を出しておきました。『満済准后日記』の満済は室町時代の黒衣の宰相と言われた人でして、義満・義持・義教の三代に仕えた僧侶で、当然宗教的な事をやりますが、政治的な相談にも乗ったお坊さんで、醍醐寺のお坊さんでした。

この人は、非常に事細かに日記を書いてくれているんです。それが『満済准后日記』という日記なん

です。

今回これを見直してみますと、足利義教が將軍となるのが、永享元年（一四二九）です。翌二年から七年まで足利義教將軍の下で度々和歌の会や連歌の会が催されます。

そこを見ますと当然、幕府の有力な大名と貴族も参加しているのですけれども、そこに山名時熙の名が度々出て参ります。

ここにはサンプルとして永享二年（一四三〇）と三年（一四三一）の二年間の事例を出してみました。

永享二年は正月十九日に新造御会所連歌と出てきて、これが「御代^{みよ}の初度^{しよど}」とでてくる。

義教が足利將軍となつて將軍の屋敷・室町殿で行う初めての連歌会であつたので「御代の初度」。実際に日記を見ていくとこれから毎年連歌会は開かれています。

この年だけでも二月七日には、再び室町殿で連歌会が開催され、この時、脇句に時熙が和歌を詠んでいます。これについては資料をご覧ください。

『満濟准后日記』にみえる山名時熙の参加した歌会
永享二年～永享七年
(永享二・三年部分)

永享二年（一四三〇）	
正月十九日	室町殿新造御会所連歌（御代初度）
二月七日	室町殿連歌御会脇句は時熙
三月十七日	妙法院にて連歌
三月十八日	妙法院にて連歌脇句は時熙
六月二十九日	摂政家にて連歌
七月十日	室町殿月次連歌頭役は時熙
永享三年（一四三一）	
正月十三日	歌会始
正月十九日	室町殿月次連歌初め
正月二十日	赤松亭御連歌
二月二十七日	室町殿月次連歌
二月二十八日	室町殿月次三首和歌
三月十日	室町殿連歌
四月十日	室町殿月次連歌
六月十日	御連歌
七月十日	室町殿月次連歌脇句は時熙
九月十一日	御歌会
十一月十日	室町殿連歌
十一月十四日	室町殿御歌会頭役は時熙

この時の日記によると、

①永享二年二月七日

今日、室町殿連歌御会之在り。今日は面々還礼に張行之を申す。懸物各之を進め了ぬ。
(中略) 山名入道(時熙)、石橋左衛門佐入道、赤松左京大夫入道、一色兵部少輔、京極加賀入道、赤松伊予守、同大河内、一色吉原入道、山名中務大輔、大館駿河入道等、寄合て一献料並びに扇六十本之を沙汰了ぬ。懸物に於ては山名赤松兩人は各五種、其の外は悉く三種二種等なり。三上入道同前、三條大納言公保卿、懸物は三種之を持参す。
御発句室町殿 今ふるは空に残るか春雪はるのゆき
脇句山名入道 風さえかへるおとや二月きふにいげ
一座の儀、毎時、珍重珍重。第三摂政之を沙汰すなり。

『満濟准后日記』

つまりこの連歌会というのは、懸物といって賞品を持ち寄るんですよ。それで連歌を詠んで一番出来の良かった人たちに、懸物が与えられるんです。こういう形の連歌会が室町殿で行われた連歌会の一形態であつたことが分かります。

この条には幸いなことに、最初の部分の和歌が載っています。

室町殿つまり足利義教が最初の句を詠む。

「今ふるは空に残るか春雪はるのゆき」と詠む。

脇句の山名入道時熙は

「風さえかへるおとや二月きふにいげ」と詠む。

連歌というものは、簡単に説明をしておきますと、元々和歌を詠むというのは、一人の人が五七五七七五をつくるわけです。ところが連歌というのは、上の句と下の句を切つてですね、一人目が五七五(上の句)を詠みます。すると別の人が、七七(下の句)を付ける事により、一つの和歌が出来るわけです。そうすると三人目もいるわけです。三人目はこの七七に合う別の五七五を、これを付けていく。これをズーツと詠み続けていって、最低百首詠むんです。

ですから連歌というのは最低三人で出来る。但し、

三人で百首詠むというのが一般的なパターンです。

宗祇そうぎの有名な連歌集を『水無瀬三吟百韻』と言いますが、三人で百韻詠むんです。ですから三吟百韻なんです。こういった所にも山名時熙が和歌と一緒に出てきて、『満濟准后日記』の幾つかの時に山名

時熙の連歌を拾うことが出来ます。

全部見ていくと時間が無くなりますので、次に行きますが、引き続き史料の永享二年七月の日記には

② 永享二年七月十日

室町殿連歌御月次。山名右衛門督入道頭役勤仕す。同じく発句之を申し入れたぬ。

今日、立秋なり。

けふたつは秋も千とせのはしめかな 常熙

脇御沙汰

萩にはおとのかわる松風

第三撰政

夕山の軒端にちかき月待て

〔満濟准后日記〕

つきなみ

月次というのは月ごとに行う連歌。この時には山名右衛門守入道（時熙）が頭役、つまり連歌会を行う中心役となっている。頭役であったからでしょうが、時熙が発句も付けています。

「けふたつは秋も千とせのはしめかな」常熙

と詠み、常熙と書いてあるのは山名時熙の出家名です。この頃には時熙は出家していたことがわか

ります。

永享二・三年の山名時熙が参加した連歌会は前出のように全て出しておきました。そして山名時熙がそれなりの役を負った所は注記を付けておきました。このように山名時熙は和歌や連歌の世界ではそれなりの役割を果たしていた人物とわかります。

今回は山名関係を中心に見ており、他の赤松や一色等がどうだったかまでは詰めていないのですが、山名時熙は先ほどの系図に「詩歌世に伝ふ」とあるように、他の大名とは違った存在感を示していたと考えておきたい。

その続きに『草根集』という資料を出しておきました。

『草根集』（正徹の歌集）

永享元年（一四二九）→享徳二年（一四五三）の間に、熙貴・持熙・教豊・教之・勝豊・持豊邸にて歌会・連歌会に参加

これは連歌師・正徹の歌集なのですが、和歌だけでなく何処で、どんな時に詠んだかが、出ているんです。

この正徹は山名家で度々、連歌の会を行っている

んですね。熙貴・持熙・教豊・教之・持豊・勝豊等の屋敷に行つて歌会や連歌の会に参加していたことが、草根集を読むとわかります。

山名といえは宗全で、応仁の乱で京都を焼き尽くした人物であるとか、大河ドラマの萬屋錦之介が演じた山名宗全も、荒々しいイメージで表現されるわけです。ところが山名持豊もこういった和歌を少なからず詠んでいたことは資料から確認されます。

そして山名氏の周辺には連歌に関わつた人物が何人か認められます。

・高山宗^{そうぜい}砌という人物で、宗祇等に連歌を教えた連歌七賢の一人で、山名氏の被官であつた高山氏の出身で、特に山名宗全と密接な関係が有つた。また北野連歌会所の奉行も務めた人物です。

・行助と言う人物も、連歌七賢の一人で元々山名氏の家臣。連歌は宗砌より学んでいる。

・太田垣忠^{ただとよ}説という人物。この人も山名家の家臣なんですけども、宗砌の連歌にまつわる教えをまとめた『砌塵抄』という書物をまとめている。

意外と山名家は和歌や連歌に関わりが、これらの事例から他家より深いという想像ができるわけです。

勸進猿楽

もう一つは、室町文化に代表される猿楽能です。現在は能楽と言われますが、室町時代は猿楽能と言われることも多かった。

猿楽能は元々物まね芸から始まり、人物をまねる、様々なものをまねる事で芸能にしていくなので、それを物まね芸から一段高めて能楽に押し上げたのが、世阿弥なんです。

それ以前は猿楽能と言われていたものを、世阿弥が能楽として一段高く芸術的にしましたが、一方では面白可笑しい旧来の猿楽能は猿楽能で継続をしていくのです。

よく話をするのですが歴史の勉強、特に高校までの歴史の勉強などでしたら、室町幕府が出来ました、はい室町時代です・・・としますが、しかし実際にはそうでは無いですよ。

政治体制が変わっても、文化はすぐには変わりません。ある程度、旧来のものが続きますし、受け入れられれば古い形のものも残るんですよ。猿楽能についても、そう言う面白い部分であつたのかなと、推測をするんですが。

特に室町時代、勸進猿楽と言ひまして、勸進とは現代風にいえば募金活動なんです。室町時代はお寺を建てる、橋を架けるといふ時に、勸進というやり

方が非常に沢山行われて、勧進のための芸能というものも開催されました。

『建内記』という、万里小路時房という貴族の日記ですが、これを見ていきますと、勧進猿楽で山名持豊が関わったものを認めることができます。

① 文安元年（一四四四） 五月二十七日

今日、土御門河原に於て勧進猿楽有り。来迎堂の勧進と云々。山名張行す。善美を尽くすと云々。棧敷数十間、三宝院已下諸門跡見物と云々。

山名已下武家の輩

畠山・細川等棧敷を打たずと云々。

今日、山名の小者等薄綾を着せしめ了ぬ。前代未聞の過差と云々。

（『建内記』）

「山名張行す」とは山名が主催すると言う意。「三宝院」と言うのは醍醐三宝院のお坊さんで、『満濟准后日記』の「満濟で有ったか。その時まで、満濟が存命かどうかまでは押さえていないのですが、ちよつと微妙な年なんですけれど、諸門跡も見物に来了た。」

「山名已下武家の輩」以下は残念ながら切れてい

る。

土御門河原での勧進猿楽ですが、山名氏が旦那になつてゐる京都の西にある長福寺というお寺の来迎堂を指すと考えられてゐるんです。長福寺というのは梅津にあります。その来迎堂を建てるための勧進だつたようです。

棧敷と言うのは見物席の事です。イメージ的には祭りの際の有料席のようなもので、その棧敷を山名が唯一出した。恐らく山名が主催しているからだと思ひます。

② 翌、五月二十八日

今日、河原又猿楽有りと云々。三宝院昨夕より車を預けらる。今朝又廻られ了ぬ。

芝居見物の輩、出錢を免ず。山名其の分と称し式千疋之を出すと云々。

（『建内記』）

三宝院様が気に入つたと見え、翌日も見に来るわけです。

芝居というのは、現在の芝居の語源。当時、大名等有力なものは棧敷を設けて見るのですが、一般庶民はどうするか、棧敷は有料席なんですよね。一般庶民は舞台と棧敷の間の土の所に座る、そこには芝

があつたりするんです。芝の所に座るから芝居なんです。

これによると、一般の見物には銭を取らないことにして、その分は山名がみんな出している。山名宗全が京都にあつて、こういう事で人気を得ようとした、あるいは京都庶民の政治批判の声を聞く機会として都合が良い。そういった中で山名宗全は勸進猿楽を庶民達にただで見せ、庶民からの支持も得られる、また庶民の考えも聞き取れると、いうような意図も恐らくあつたと考えられる。

宗全は連歌についても正徹から教えを受けていて、永享五年や永享七年に行われた北野一万句連歌会（『師郷記』永享五年二月十一日・永享七年二月二十一日）にも参加している。

寛正七年（一四六六）の正月二十二日には、将軍義政が宗全邸に御成りをして連歌を行っている。その時の協句として付けた和歌が残っています。

発句（将軍）

八千年の影もあらたま椿かな
に對して

亭主（宗全）

立枝数そふ梅の木たかき
と詠ったものが残っている。

このように宗全についても連歌の記録も伝わっているが、時熙に比べて宗全の連歌の史料は少ない。逆に言えば時熙が如何に和歌に堪能で後世に伝わる和歌を沢山作ったのではないかと想像しているところです。

もう一つ注目するのは、山名宗全は室町殿蹴鞠（『師郷記』宝徳二年三月二十日）というのにも参加しています。

蹴鞠というのは元々は公家文化の産物です。これについても足利義満あたりから武家も蹴鞠に参加するようになる。そういった中で宗全も将軍家での蹴鞠に参加するようになった事をここに紹介します。

それから山名宗全は鞍智高春（春公）とも近い関係で、『碧山日録』という東福寺のお坊さんの日記の中に寛正二年正月六日・三月十八日の部分に出てくる。

春公は池坊専慶を引き立てていた武将で、直接に池坊と山名が関わったかは不明だが、この時代、誰か間に人を挟み文化を担う人は繋がっている。

想像するに宗全も池坊の花を目にしたことがあるのではないだろうか、と想像してみたくもなります。

二、山名氏と禅宗

続いて京都における山名と禅宗の関係について簡単に紹介します。

山名時熙は月庵宗光に帰依して、南禅寺に塔頭栖真院を設け、月庵の法流の大蔭宗松を開山としている。文安四年（一四四七）七月四日、には栖真院にて山名時熙の十三回忌法要も行なわれている。

山名持豊（宗全）は文安二年（一四四五）、香林宗簡を招いて、南禅寺塔頭真乗院を開いている。

真乗院の中に遠碧軒という禅室を開き、建仁寺塔頭大龍庵・梅津長福寺の檀那、つまり外護者、お寺を経済的に支える存在として現れている。また、宗全の遺骨は真乗院遠碧軒に葬られたとなっています。

山名時熙と宗全の一部分ですが、文化的な関わりはこういった所に指摘が出来ると思います。

三、室町文化の特質

北山文化と東山文化の関係

室町時代というのは高校までに、北山文化と東山文化の二つがあると習って来ました。しかし近年はそういった見方を見直す方向で考えられています。

山名時熙を中心に今まで見てきたように、北山文化の三代義満、東山文化の八代義政の間の四代義持

・六代義教の時代も連歌などが大々的に行われているし、また、室町時代というのは中国から輸入された美術工芸品の「唐物」が非常に愛好された時代と言われるのですが、実際、室町将軍はこの唐物をコレクションします。

当然当時の日明貿易は幕府がやっていますので、中国から輸入されたもので一番良い物を室町将軍が取るわけです。そして、義満・義教・義政には唐物コレクションが形成されたことが分かっています。現在残っている中国の水墨画には「天山」とか「道有」と判が押されたものが、義満のコレクション。それから「雑華室」という判は、義教のコレクションの印ということがわかっています。

これは印が押してあるわけではないのですが、皆さんご存知の「東山御物」、これが足利義政のコレクションです。「東山御物」はこの後、茶の湯の世界で非常に珍重されます。現在でも尚珍重されていますが、美術館や博物館に収まっているものが大多数です。

このような唐物のコレクションは歴代将軍の中で蓄積され、義満だけでも義政だけでもないんです。

もう一ついうと、義政の東山御物というのは、義政の時代から幕府の財政難から流出していた事実もあります。ですから東山御物というのは、幕府の唐

物コレクションの解体期にも入るのです。

近年こういった事実、東山文化が終わったもう少し後の天文の時代になると、お茶とかお花の文化が固まってきて都市文化としての室町文化がはつきりとしてくる。

そう考えてくると北山文化と東山文化。この二つの文化は、東山文化が重視された故のことなのです。東山文化の重視は茶道のためなんです。明治からの研究で茶道の認識が強く影響を与えて、東山時代・東山文化となったのですが、義満の時代の文化もあるではないかと北山文化といわれ出した。

現在ではそのような文化区分では室町文化の総体は掴めないだろうと考えられ、室町文化というのはある程度、見直しが必要と考えられるようになります。

伝統文化の原型

室町文化にどのような特徴があるかと言いますと、一般に室町時代の文化とは現在の我々が伝統文化と考えたり、日本の文化と考えるものが、だいたいこの時代に生まれたと言えます。それらは能であり、お茶であり、お花である。

学生に外国人に日本文化を紹介する時に何を思い浮かべる、と聞くと、お茶・お花・能、そういったものは必ず出てきますよね。こういったものが室町

時代に原型が出来上がったことは間違いない。

しかし、我々が伝統文化と言っているものには、あと二つの段階が必要なのです。一つは江戸時代、もう一つは明治時代。

ちなみに伝統文化とか、伝統芸能あるいは国技といった概念は近代以降に生まれた思想なんです。

つまり江戸時代まではそういった認識はないんですね。

室町文化に見る「包括の論理」

また室町文化には「包摂の論理」が認められます。室町文化とはある意味で様々なものを認めていく文化だったんです。

鎌倉時代は「選択の文化」とよく言われます。

鎌倉時代と言うのは文化現象の中で、何か一つを選択する文化なんです。一番分かり易いのは、鎌倉新仏教です。それまでの平安仏教は仏になるためにできるだけ色々な事をやるわけです。

ところが鎌倉新仏教では浄土・浄土真宗では念仏だけをしなさい。日蓮宗なら法華経のみを信じなさい。禅宗であれば坐禅をしなさいと、なるわけです。

ところが室町時代はそうではないんですね。室町時代には禅宗が非常に大きな力を持つわけです。これは歴代室町将軍が禅宗に帰依したからなんです。そのきっかけを作ったのが夢窓疎石です。

夢窓疎石は『夢中問答』を著し、その中で、夢窓の言葉として禅の修行をするのにどのような修行をしても構わないとして、念仏を唱えたければ念仏を、座禅を組みなければ座禅を組みなさいと言う。室町の禅は非常に面白い。何故禅をするのかと言うと、臨済宗では仏は既に自分の中にあると考えるのです。ただそれが見えないだけなんです。それを知るために座禅を組み、そして自分の中の仏を見いだしていくと言うことなんです。

ところが夢窓疎石は、その為には何をやってもらいのだと言います。様々なものを含み込むという考え方は、室町文化の端々に見えます。

例えば金閣。皆さんは金閣は金閣として見ていられますが、実はこの建物は非常に変なんです。お分かりになりますか。

今でも住宅を建てる時、建築様式の一つです。すよね。ところが金閣を見て下さい。一階は寝殿造り、二階は武家造りです。三階は禅宗の寺院の建築です。

つまり、異なる三つの建築様式を一つに突っ込

金閣



んで、それで違和感が無いわけです。

ただ鎌倉時代はそうではなかった。禅宗様は禅宗様、天竺様は天竺様。という建て方をする。こういう建築様式を見ても、様々なものを一つの中に取りこんでいることがわかります。

この時代、石清水八幡宮に奉納した和歌集に、百首の和歌が入っているのですが、面白いことに全て「月」を詠んでいるのです。『石清水社奉納百首』永享十年（一四三八）

これは月の色々な姿を百首に詠む。見る人により様々に見える月を歌集としてまとめる。ただ一つの見方では無く、多様な見方や表現を試みている。

竜安寺の庭園もそれが少し進んだ形です。この庭園には様々な説明があるのですが、私にはこの庭が良くわからない。

よく観光的には「虎の子渡しの庭」や「七五三の庭」といわれるんですが、室町時代までの庭園では石組みや島に意味があるんですが、つまり瀧を意味したり、鶴島・亀島を表したりする。とこ

竜安寺庭園



ろがこの庭だけはそんな説明ができない。

この庭は、見る人は何処かに座ってずっと庭と対話するのを見うけるが、実はその見方は間違っている。この庭は見る人が移動することで様々な景色に変わる面白さがあります。

ですから正面からだとかうなりますが、同じ物なのに景色が変わっていく、見る人と動かない庭園の関係を变えていく。それでこれを「取り合わせの面白さ」と表現できます。

大徳寺大仙院はもう少し時代が遡るかも知れませんが、山の奥から水が流れ、川となって、海に流れ込むところを表現していますが、当然庭は動きません、ですからこの庭を鑑賞するには上流から下流に人が動いていかなければ、その変化がわからな

い。
もう少し前に位置づけられるのが西芳寺庭園ですが、この庭園は実際に人が庭に下りて見る庭園の初期のものです。

平安時代の庭園は寝殿造りの屋敷の上から見るだけ、室町になると庭に

大徳寺大仙院



西芳寺庭園



曇らす (左)、照らす (右)。

自分が入って見に行く。
西芳寺の池も不規則な形をしています。人が庭園に入って刻一刻と変化する風景を楽しむという庭です。

それは能にも言えるのです。能面は表情が無いというイメージがあるが、能面を下に向けると「曇らす」といって憂いを含んだような表情になり、少し上を向けると「照らす」といって明るい表情になる。これも能面を付けて所作を付ける事で、能面とい

う一つのが笑っていたり、泣いていた見える。これも一つのシチュエーション、組み合わせの変化で生まれたもののなのです。

これも有名な「瓢鮎図」。これは禅機画と言って禅問答を回答したものです。

これは「ヌルヌルした鯰をツルツルの瓢箪で押さえることが出来るや否や」という問いなんです。

瓢鮎図の全体はこういうもので、上に文字が書いてあって赤い印が付いている。

この間に対して色々な禅僧が上に答えを書いていく。これも一つの絵でありながら、その見方はこれだけ沢山有る。十人十色と言いますか。

このように室町文化というのは、全体として様々なものを内に含みながら、一つ一つのものを見ていくと組み合わせの面白さというものがある。

詩画軸というものも同様で、これも下に絵が描いてあり、上にはこの絵に付けた讃や漢詩が書いてあるんです。

この組み合わせの最たるものが連歌で、資料の『静嘉堂本百番歌合』

瓢鮎図



を見ていただくと、

『静嘉堂本百番歌合』百首の前句に、救済・周阿・心敬がそれぞれ別々に付句を付ける。

前句 火かと思ゆるは螢なりけり

漁船とまる蘆まのくらき夜に 周阿

春ははやすぐうの薄しげる野に 心敬

「火かと思ゆるは螢なりけり」と前句、つまり下の句があると、これに対して周阿という人は「漁船とまる蘆まのくらき夜に」という上の句を付けて、「漁船とまる蘆まのくらき夜に火かと思ゆるは螢なりけり」という一首にする。

それで、ここでいう火とは沖で漁をする漁師の漁り火となるわけです。

しかし、心敬という人は、「春ははやすぐうの薄しげる野に」と上の句をつけて、「春ははやすぐうの薄しげる野に火かと思ゆるは螢なりけり」として、火を春先の野焼きの残り火かと思えば、螢の明かりであつたとする。

火というものを人により様々に見立てて和歌を作った。それが連歌の一つの本質です。

次の資料に『水無瀬三吟百韻』を出しておきました。

『水無瀬三吟百韻』宗祇・梢伯・宗長

長享二年（一四八八）

雪ながら山本かすむ夕べかな

宗祇

行く水遠く梅匂ふ里

梢伯

川風に一もと柳春見えて

宗長

先ず発句ですが、「雪ながら山本かすむ夕べかな」で次の人物は「行く水遠く梅匂う里」と下の句を続けて一首を作っています。そうするところで詠われる情景は、雪が残る冬から梅の香り漂う春へと移ろう情景が詠われている。

ところがもう一つ別の上の句「川風に一もと柳春見えて」に続いて「行く水遠く梅匂ふ里」となれば、柳や春が読み込まれて梅の匂いは遠ざかり、つまりこれは初夏の情景を詠ったものとなる。

つまり連歌というのは、複数の人が和歌を作り続けていき、和歌の表現が刻々と変わっていく面白さを追求する。これも、上の句と下の句の取り合わせを如何に面白く作っていくかと言うことになる。

こういったものは、室町時代に生まれた生け花にも見ることが出来ます。

室町時代の生け花は、基本的には中心になる心の枝と、下草の二つの組み合わせで、それに加えて左

右に花を添えていく。つまり同じ材料を使っても、人によって様々なものが出来る組み合わせの面白さが、この時代の生け花

たてばな

：立花となるわけです。

原型は室町時代ですが、完成は桃山時代となります。

茶の湯も同様ですが、室町の茶の湯は良く分かっている。

ところが戦国期になると使用する道具や掛ける軸を組み合わせて、どのように一つのお茶席を作るか、様々なものを取り合わせて茶会をやる。取り合わせの文化が突き詰められたところに、茶の湯の文化が生まれてくるのです。

室町文化が鎌倉文化と違うのは、鎌倉文化のよ

花王以来の花伝書



うにただ一つのことを喜ぶ文化ではなく、様々なものを認め、組み合わせていきながら、それを楽しむ文化である。

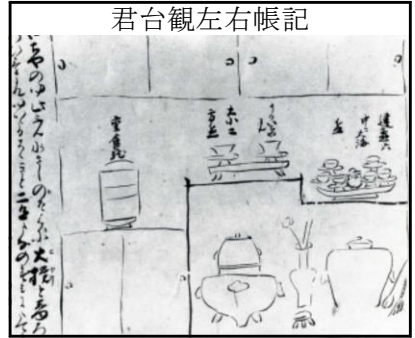
言ってみれば、これが「和の文化」とも言える。この「和」は風の「和」ではなく、調和の「和」となりま

す。その中の一つ一つを見ていくと、同じ一つのものでありながら、それと向かい合う人間の組み合わせ、取り合わせの面白さが、室町文化の特質あるうと考えられます。

では室町文化の特質として共通するものは一体どこから出てきたものだろうか。はつきりこれだとは言えない部分はあるのですが、禅思想も一役かっていたと思います。

禅の思想の中には「一即多、多即一」という考え方があります。つまり、一つものは沢山のものである、沢山のものは一つであるという基本的な考え

君台観左右帳記



室町時代に禅の言葉でよく出てくるものに「臨機応変」があります。これは元々禅の言葉ではないのだが、禅の重要な言葉として取り入れられました。つまり、「機に臨みて、変に応ず」。これはズバリ取り合わせの発想になる。

室町文化というのは、取り合わせの面白さが特質であつたろう。室町文化が起点となつて、江戸：そして現代へと続く中で、我々が言っている「伝統文化」と言っているものの原型が生まれた時代であつたと言えるように考えられます。

平成27年山名会歴史講演会（H27年11月28日）
にて

参考文献

- ・石田一良『日本の開花』（大世界史 十二）文藝春秋 一九六八年
- ・笠井昌昭「日本芸能史」『ざ・いけのぼう』日本華道社 一九七三年
- ・山本隆志『山名宗全』（ミネルヴァ日本評伝選）ミネルヴァ書房 二〇一五年

図版出典

- ・金閣 佐藤和彦、下坂守編『京都ルネサンス』河出書房新社 一九九四年
- ・大徳寺大仙院 「大仙院パンフレット」
- ・竜安寺庭園 『名園を歩く 室町時代』毎日新聞社 一九八八年
- ・西芳寺庭園 『週刊日本の美をめぐる』三四 小学館 二〇〇二年
- ・能面 ブログ「能楽師日記」
(<https://yaplog.jp/tatsushige3/archive/751>)
- ・瓢鮎図 辻惟雄『日本美術の歴史』東大出版会 二〇〇五年
- ・花王以来の花伝書 『いけばなの成立』（『いけばな美術全集』二）集英社 一九八二年
- ・君台観左右帳記 『古代中世芸術論』（日本思想大系）岩波書店 一九七三年

付記

当日の内容に明らかな事実誤認のあった箇所があったので、その部分は内容を修正した。
ただし、大筋については当日の論旨とは変わらない。

松本公一教授プロフィール

池坊短期大学環境文化学科教授

1961年生

同志社大学院文研究科博士後期課程満退学
(文化史学)

専門…日本宗教文化史・伝統文化論

平成27年山名会歴史講演会第2講

京 応仁の乱の前と後

Room to Grow 山本義典代表

(山名会活動記録のビデオより起稿)

講師紹介 (山名年浩会長)

先ほどの松本公一先生は室町時代に焦点をあてたお話でした。室町期に現代に通じる習慣やしきたり、伝統文化と言ったものの基礎が形成されと言う事。もう一つは、山名氏が文化的にどう関わったかという、他では触れることが出来ない事柄を、史実に基づいて紹介していただきました。

次の講師の山本義典代表は、先ほどのお話とは雰囲気ガラッと変わって、退屈をしないお話になるうかと思えます。

山本氏は京都の人でして、華道美生流の美生家、春月堂香峰として、禁裏不出の華道の流れを受け継いで居られます。

また山本氏は日本文化への造詣は深いものをお持ちですが、アメリカの州立ハワイ大学・音楽学部のご卒業でして、以降、音楽やバレエ・映像等の分野を中心に活動なさいました。また、カナダ・ブリテ

ィッシュコロンビア州リッチモンドの代表教育委員にも就任なさっています。

それでは山本先生よろしくお願い致します。

はじめに

後攻めの大変な事が起こりまして、松本先生のキツチリとした論理的な講演の後なのですが、私の場合は、どちらかと言うとフィーリングでお話しをしていきたいと思えます。講演時間は一時間以内、スタッフからは原稿を書いたのだからアドリブではやるなどキツク言われて居ります。どういう形で話が進んでいくかは分かりませんが・・・お付き合いください。

今日の講演、私としては山名氏については門外漢で、そこには深く触れられない分、その代わり持つて帰って貰いたいものが二つあります。それは話として、言葉として余り知られて無いことかも知れません。まずは皆さんと一緒に絵を見ながら、想像し

ながら、共に歴史を考えて見たいと思います。



略図 応仁の乱

応仁の乱の出発点

そもそも応仁の乱とは何やったんや？山名会の皆さんは応仁の乱がどういった経緯で起こったかは大体分かっておられると思います。先ほどの松本先生のお話しとかなり重複した内容もあるかと思いますが、先生のお話も思い出しながら、この地図上で私と共に歩いてみて下さい。

応仁の乱は文献によれば10〜13年続いたとか？皆さんはこの戦いはどんな戦いだと思いませんか？

例えば宇治川の戦いなどは、軍勢が川を挟んで東西で向かい合い、誰に当たるかわからない状態で弓を45度の角度で打ち合って戦いが始まるのです。応仁の乱と言うのはこの地図をご覧ください。

山名・細川の屋敷は堀川通りを挟んで歩いて5分ぐらいの距離、この近い距離で戦うんです。細川勝元の弟を攻めて応仁の乱が始まるという一説、その前に、足利将軍が殺されます。畠山氏で家督争いが起こり、御霊神社で戦が始まったのを応仁の乱という方もあります。日本の歴史の枠の中で、応仁の乱とは何処に位置するものなのかは後ほど説明します。山名邸から細川邸を攻め、天皇や公家、細川方は花の御所に入る。花の御所は1〜2丁角程の狭さ、御構(おんかまこ)という土塁を築き、砦として、山

名勢の攻撃に備えるわけなんです。

山名側・西軍は大宮五辻に軍を置き、そして御霊神社・相国寺・百々橋等の戦いが有ります。その戦いは大きなものでなく、あまり弓矢・刀を使わない戦いで、では、何をしたかというと放火合戦でゲリラ戦なんです。

山名方・細川方は約三年間、丸太町通より上、上京と言われる地域で放火合戦・引火合戦を行う。これが（初期）三年間の応仁の乱です。

その後、大將らは日野富子の和解策で、ならば和解しようかとなるんですが、その下の家来たちは、どうしたかという、何や分からんけど自分らは未だおさまらん事があるので、領国に帰って戦いを続けます。これが10く13年と言われる、応仁の乱の歴史的スパンです。応仁の乱の発発はこういった距離感の中で有ったと言うことを認識しておいて下さい。

チョット散歩しましょう。

①②御霊神社。御霊神社の林、ここに陣を構えたという雰囲気

③相国寺。これは法堂といって応仁の乱後にできたお堂です。ここは法堂に向かって地面が高くなっています。これは総構えの跡なんです。

④相国寺の池。池を挟んで山名と細川が対峙した。

何故、相国寺が大事かというとな花の御所が目の前だからです。これは同志社の寒梅館でここに「花の御所」があつて、天皇や將軍や公家が居りました。ここを獲りたいんですが、日本の施政者というものはトップを絶対に殺さない。そういう考えがある。西洋では、ナポレオンが時の皇帝を倒して、自分が皇帝になるような事があるんですが、日本では、町衆が將軍や天皇を倒し、その地位に座するという、それがありません。

⑤宝鏡寺。日野富子が「代理戦争みたいなのを止めなさい。」と和解策を行った場所。

⑥花の御所の室町通側。道が少し歪んでいる。これが土塁跡のレベルです。要は道がたわんでいます。

⑦大宮五辻西陣、西軍が集まってここから出陣した。

⑧百々橋の戦い、この川幅くらいで戦っていました。

⑨細川勝元邸付近だろうという場所。

⑩山名宗全邸の跡。

⑪山名町、宗全が住んでいたであろう街並み。

⑫山名町から細川邸側を望む、堀川を隔てて。



②御霊神社の林



①御霊神社



④相国寺の池



③相国寺



⑥花の御所裏側



⑤宝鏡寺



⑧百々橋



⑦大宮五辻・西陣



⑨細川邸の跡地



⑩山名宗全邸跡の碑



⑪山名町



⑫山名町から細川邸方面を見る

祇園祭の山鉾に見る時代区分

余談として、神泉苑の鉾立てというのをお話ししたいのですが、

京都遷都の時に、長岡京から京都にどうして都を移したか？その理由の一つに怨霊というものがあります。当時、疫病・赤痢とかが流行って全て怨霊の仕業と考えた。科学的な分析が出来なかったのですね。うなつたんですが。

その怨霊を鎮める為に鉾を建てます。これを「御霊会鉾建て」と言います。これを覚えておいてください。

今の神泉苑御霊会の鉾建ては（祇園祭の山鉾の）上部のみの部分、平安時代は上部のみでやっていました。

ところが室町時代ある出来事があって、鉾の下に山車がついて今の山鉾の形となりました。

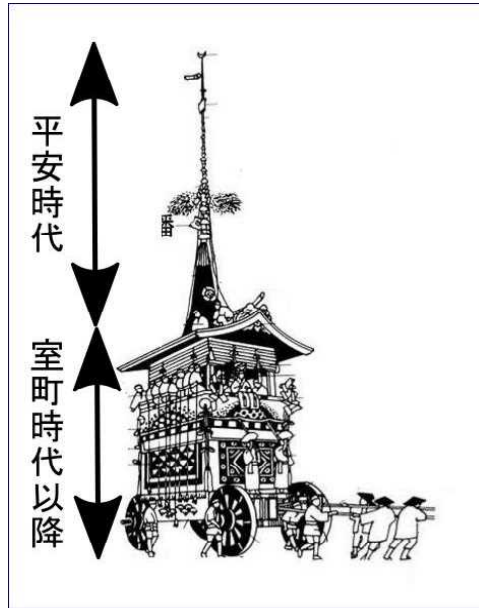
歴史の分岐点を山



神泉苑の鉾立

鉾で説明すると、平安時代は屋根の上の鉾だけでお祭りをしていたが、屋根のところが室町時代の分岐点で、室町以降は山車の部分にあたる、ヒントは山車の調度にあります。

始めは朝廷や公家達が怨霊や流行病を鎮める為に



鉾の山鉾祭園祇

鉾を建てて拝んでいましたが、室町時代以降からは祭りの様子が変わっていきます。

僧坊酒と利権

皆さん、僧坊酒ってご存知ですか？寺で出来る酒

と思って下さい。平安時代から江戸時代まで、お寺の中でお酒（ドブロク）を造っていました。

まずこのお話をして、最後に硝酸カリウム・・・のお話しをしたいと思います。今日私の話を聞いて、何か得て帰ろうと思って居られるなら、「僧坊酒」と「硝酸カリウム」を覚えて帰って下さい。

平安時代から僧坊酒は大きなお寺で作られていました。僧坊酒にも酒税が掛かってきます。これが朝廷や公家、いわゆる権門という人たちを経済的に潤していたし、寺家の経済的基盤ともなっていました。経済の基盤は他にもあるのですが、今日はお酒で話を進めます。

室町時代近くとなると、酒造りで肝心の糶作りの権利を寺院から土倉屋（倉庫業）が得て、土倉酒屋として酒を造り出します。これは専売ですので、凄く富を得ます。酒造りで大きな富を得た土倉酒屋は、金融高利貸などを行い、施政者や権力者に接近をしていく訳です。

京の豪商と堺衆

その頃の堺は自由貿易都市・環濠都市で、そしてお金があった。その堺の土倉業の一つ田中家、時代を下ると堺衆・納屋衆と呼ばれ、京都に来たら千家と言われる。現在は三千家、そして納屋（淡交社）。

この時の千家とは千利休で京都の文化・政治を支えたのです。

戦国時代・桃山時代と呼ばれる時代に京都では法華の乱が起きて、豪商の法華信徒は京都を離れて堺へ移住します。そして堺衆と都の豪商が結び付いて、唐物商いや・高利貸として発展し徐々に政商化していくことになります。

鉄砲の伝来と国産化

またこの頃、種子島に鉄砲が伝来しました。鉄砲が百丁程伝わった訳ではなく二丁だけだったのですが、一丁は堺に運ばれ雑賀衆（根来）に預けられます。もう一丁は滋賀の国友村に持つていかれます。どうして堺と国友村に一丁ずつ持つて行かれたか？日本は刀を使う国です。刀を作るには鉄が必要で、日本の鉄を鍛えていく工業力については当時の世界の中でも優れたものを持つていたと思えます。その中でも堺と国友が鉄を鍛える技術に秀でていたから鉄砲が一丁ずつ預けられ、国産化を研究させたのではないのでしょうか。

しかし、鉄砲の精密な複製は行えたのですが、仏つくつて魂いれずで、何が無いかと言えば火薬が無いんです。火薬がないことには弾は少しも前には飛んでくれません。当時、輸入される火薬は非常に高

価で、これを手に入れる事が出来る施政者が鉄砲を入手して戦で活用できることになりました。

堺衆の精神性

堺衆や京都の豪商達は禅を精神的な拠り所としていた。しかし元々は法華の乱で京都から堺に移って来た法華衆でもあった訳です。この辺が宗教的に混沌とした、ややこしい時代でもあるのです。

彼らは法華教団に精神性を求めつつ、施政者に対しては政商化、今で言うところの黒い商人になりました。この図式を説明するのに参考にして欲しい余談があります。

ご参考（余談）

夢窓疎石	対	一休宗純
足利尊氏	対	足利義満
天竜寺・京都五山	対	大徳寺

臨済宗の夢窓疎石と一休の取り合わせは、思想的にも学派的にも相反する。夢窓疎石が作ったり、関係したお寺は京都五山や京都十刹ランクと言われています。大徳寺はその枠から外れている。これは一休と無窓の考えの違いからです。

ここで想像して欲しいのですが、法華信者の千利休が何故、禅の大徳寺と関係を持ったか。豊臣秀吉の家臣達は何故大徳寺に菩提寺を作ったのか。想像して下さい面白いと思います。

政治・文化・経済の分岐点

※資料 1

1192 年

関ヶ原の戦い
1600 年

織田 信長

内紛統一・領地拡大

源頼朝武家封建制度

頼朝 政権

源平合戦

応仁の乱
(1467~1477)

室町幕府

・北条期崩れだす
・地頭職が兵役に駆り出される
・頼朝恩顧武家集団の不満
・後醍醐天皇の親政意欲
・荘園機能の崩壊
・蒙古襲来
・鎌倉新仏教
・自然発生的

下剋上(戦国時代)
・自由都市・堺(納屋衆)
・唐物輸入
・鉄砲、火薬
・地子銭免除
・貨幣の流通
・法華宗
・一向一揆
・形成論理的

豊臣秀吉天下統一

徳川 家康・厭離機士

・足利義政(8)
・応仁と隠居
・山名・細川
將軍家継承
問題代理戦争
・応仁・文明の乱

南北朝
時代

鎌倉幕府
・源三代
・北条時代

平家政権
・親政行政

農民、職人、商人の衆力

・東山御物
・米・文芸
・建礼・庭園

・猿蓑から能
・踊りから舞

文化・芸能・
経済の分岐
・御霊会から
祇園祭り

・明との交易
・農民が経済力をつける
(荘園では地頭が税金をとりこない)
・都市部の良質な肥料により収穫がある
・職人・商人の台頭

資料 1

そして、夢窓疎石―足利尊氏―天竜寺を中心とする五山・十刹に繋がる。一休さんは一休―足利義満―大徳寺とつながる。

応仁の乱の前と後

私が今まで多面的にしやべった事のまとめに入ります。

応仁の乱の頃を境として、それまでは自然発生的な文化や芸術だったのが、応仁の乱の後には、培った文化等を形式や文字として残し、それを伝えようとする動きが活発化します。

猿楽を例にとりますと、応仁の乱の前は猿楽は「躍り」なのですが、応仁の乱後は、猿楽は「舞」に、つまり形式を作った踊りに変わる訳です。つまり猿楽から能楽へと発展変化して行きます。

観阿弥・世阿弥親子が足利義満のバックアップを得て、能というものを完成させて行く過程で、観阿弥は口伝で様式美を後世に伝えようとし、それを引き継いだ世阿弥は口伝の様式に個々の感性を加えて芸とするシステムを作り上げ、それを花伝書（家訓）の形で現わします。

やがて、町衆達も戒めのように家訓と言うものを残すようになってくるのですが、その辺が確立出来たのが、応仁の乱後と思われるす。

応仁の乱―政治・文化・経済の分岐点

資料1の図に参ります。この表の青い部分（左下段状部分）が何を表しているかというと、我々町民です。時代ごとに言い方が変わります。農民・職人・商人という人々を青で表しています。

そして赤い線。（上部矢印部分）これが問題なんです。1467年〜1477年の応仁の乱を一つの山としました。

どうして十年間も戦っているかと言うと：足利義政將軍が政治をしなかったからです。それは8才で將軍になり最初は政治が出来なかった。それで若い内から早く隠居をしたがった。美術が好きで、言い換えると道楽に没頭したかったんですね。まあ、そういう時代の雰囲気の中、政治的決断ができずに長引いてしまった。

別の資料に平安時代から1600年の関ヶ原の戦いまでの合戦の一覧を作って見ました。件数で約460件有ります。これだけの件数の合戦が鎌倉幕府から関ヶ原までの間にブーッと続いているんです。応仁の乱だけが特別な戦いであつた訳では無いのです。

要は源平合戦が終わり鎌倉幕府が出来ました。関東平氏は頼朝をバックアップして將軍に頂きました。

頼朝のためなら戦があれば馳せ参じると言う意気込みの中、頼朝直系の鎌倉将軍は3代で絶やされます。鎌倉幕府の中の実権が北条氏に移り、頼朝恩顧の武将達は冷遇されます。

北条を中心とする関東平氏で政権を動かしていくので、源氏系統の足利氏や新田氏は頼朝のために戦って幕府まで建てて来たのに、北条氏や関東平氏達は自分たちの事を省みてくれない。その不満がくすぶって居るところに後醍醐天皇が入って来て倒幕の動きとなり、実際に鎌倉幕府は倒れる。倒れた後がまたややこしく、敵味方が入れ替わったり、一族内で争ったりして南北朝の争いを始めとしてズーッと戦は繰り返されてきました。

何処の時代でしょうか、戦が終わったのは？1600年の関ヶ原か？大阪城夏・冬の陣か？その辺が不明確ではあります。

戦の仕方の変化

室町時代の応仁の乱と言う10年間を山と考えた場合、戦はその前後絶えず起きていました。ただ、応仁の乱を峠にして戦の仕方が変わります。その一つは堺衆の存在で、先ほど申したように、堺衆は鉄砲を持っています。

応仁の乱の後の戦国時代での戦いの中では、鉄砲

を持っている人、鉄砲の情報を持っている人、それらを手に入れることが出来るお金を持っている人が、戦で勝っていきます。つまり経済というものが、戦という風に乗ってめざましく発展を果たした。

要は「腹が減っては戦は出来ぬ」兵糧を確保していないと戦が出来ない。この時代織田信長は兵農分離のシステムを構築し、食べ物を作ってくれる人と、戦う人間を分けた。従来のように兵農一致では収穫時期や冬になったら戦いを自動的に止めていた様な戦いでは、何時まで経っても京に上って天下は取れないと考えたのかもしれない。

貨幣の製造流通と商人の台頭

また、南北朝時代から日本国内で明銭に代わる自国の貨幣が製造流通するようになってきました。今まで明銭を輸入していたのですが、国内で貨幣を製造することにより、お金の価値を自国のハカリで計れるようになり、それが流通し定着するのが室町時代でもありました。

頼朝の時代は、地頭が任地の荘園管理をして税金を集め幕府に納める。僧房酒の税金の取り次ぎも地頭職が行っていました。しかし、鎌倉三代将軍の時代が終わり北条氏の時代になると戦がヒートアップして来て、地頭職も兵役に駆り出されるようになり、

農民・庶民達は税金を納めることが出来なくなり、その分肥えて来ます。肥えて来た分、余剰の産品を売りに出す商人が出てくる訳です。

お金を持った商人が出てきて、新しい文化・情報が入ってきたら、どうしたらよりお金が儲かるか？自分たちの生活がより豊になるように活用を真剣に考え、それが発展し豪商達は文化から文明の概念の世界に入ってきて成功していきます。さらに国際的な情報や、商品に関する情報、そして自ら商品の開発も行います。

堺を始めとする商人達が富豪の道を駆け上がった行くのに、繰り返される戦争が深く関わっています。勝ち進んでいる武将・お金を持っている武将は豪商と手を結び、やがては京都に入り天下統一を成し遂げて行くことになります。

単に戦だけを見ているのでは無く、経済と言うものと合わせて見ていくと、日本の政治や時代がどのように動いてきたか理解できるのでは無いでしょうか？歴史を見る時、戦だけでは無く、経済だけでは無く、並列的に物事を考えながら判断しなくては成らないと言う事が、この図面から読み取れるように思えます。

歴史というものは、戦争だけ、経済だけ、それぞれを別個に見るのでは無く、年号や細かい名称にこだわるのでは無く、歴史の節目節目に物事がどのように変わり、どんな風が吹いたか、そして土壌をどのように変えてきたか、と言う視点を今日の私の話の中から、感じ取って貰えれば嬉しい限りです。

硝酸カリウム

それからもう一つ、「硝酸カリウム」というのをご存知でしょうか？

先ほどもお話ししたように日本は鉄砲の精度の高い複製を作るのは得意だったが、日本の地質の中には火薬の原料になる硝石・硝酸カリウムが無い。火薬が無ければ精巧な鉄砲を作ろうとも、弾は飛ばない。この硝酸カリウムをインドネシア辺りで入手した堺商人が織田信長と組んで莫大な利益を得る訳です。

教科書的には鉄砲伝来で即座に信長が鉄砲隊を組織して二段撃ち、三段撃ちで勝ち進んだと言うが、事実としては、信長が領国を拡げる過程で検地を行い、取れるところは取り、施すところに施す経済政策を進め、利を挙げ富を蓄積させていく。領地を2倍3倍と拡げる中で年貢を独占するのでは無く、庶民にも還元していく政策をとり、それが経済発展を

促し更に利を得ていく。そして蓄えた利でもって、堺・京の商人、土倉業の彼らから、インドネシア産の硝酸カリウムを得る。それにヨモギ・木炭の粉末を配合して、火薬を作る。

しかし、輸入に頼っていた硝石ですが、日本国内で作った人が居るんです。作った地域は何処かと言えば世界遺産に指定された白川郷・五箇山の合掌造りの地域です。その地域で硝石が作り出された。

どうして作り出したか？・・・皆さん、尿道結石の成分は何かご存知ですか？その主成分は硝酸カリウムなんです。偶然の発見なんでしょうね？土の中に硝酸カリウムやヨモギとかを入れて熟成させると火薬が出来るんです。

白川郷・五箇山の合掌集落では大家族で冬期は交通も途絶え、排泄物が溜まりやすいんです。それに目を付けたのが武将達、特に金沢の前田氏。糞尿をヨモギと一緒に土の中で熟成させ、そして煮詰め、これを繰り返すと純度の高い硝酸カリウムが生成されるんです。

これを粉末にして、天草・木炭の粉末を加えて黒煙火薬を作ることに成功したんです。それで織田信長は自分の所の硝酸カリウム・黒煙火薬で勝利を収めていったという、裏話中の事実。

日本人は、偶然か何かで出来た事でも改良していた国民でもある事も覚えておいていただきたい。

江戸時代となり戦が無くなります。その後、火薬は江戸中期、鍵屋・玉屋といわれる江戸の火薬屋が火薬が腐るので花火にして楽しんで貰おうと花火を上げる。その頃の花火はオレンジ色一色で、他の色が付きだしたのは明治以降となります。

まとめとして

まとめですが、源頼朝が武家封建制度を作りました。それが荘園制の崩壊により旧来の為政者の経済は崩れ、それに反し、庶民は自分たちの経済力を上げていくことに努力した。

その分岐点が応仁の乱であって、將軍家は応仁の乱までは隆盛を保っていたが、乱後は衰退へと向かうのです。

応仁の乱の山を越える前と後では、明らかに日本の経済・政治の流れが変わった。応仁の乱の戦果は痛み分けであったが、日本にとって重要なブラットフォームが形成された時代と言えるのでは無いでしょうか。それを本日は気に留めて帰っていただければ有り難いかなと思っています。

最後にもう一つ、応仁の乱の戦火を逃れて、都から地方に逃げた人々が各地に残しているのが現在「小

京都」と言われる地域。応仁の乱当時、京を離れ地元の統一安定を先ず図る必要から、京都を模して街作りを進めたのが小京都。これが今は重要な観光資源となつて居ます。

室町期の応仁の乱の頃は誰が善い誰が悪いと言うことが分からない時代でした。しかし、その中に日本を変えた山があった。山を越えた以後の風の吹き方が変わった。日本の土台を形作る重要な時代であつたことは確かだと思っています。

名前を引き継いで後世に伝えるのは大変なことだと思ひますが、新田・足利・山名というのはこの図表の中で大変重要な位置を占めています。大変なこと多いかと思ひますが孫子の代まで山名という名を引き継いで下さい。

平成27年山名会歴史講演会（H27年11月28日）
にて

山本義典代表プロフィール

1951年京都市下京区に生まれ。上京区在住。
Room to Grow／山本義典企画事務所代表。

家職は、華道美生流美生家春月堂香峰。禁裏不出の幻の流派と言われる。

ー略 歴ー

1974年州立ハワイ大学音楽学学部卒業。大学にて音楽監督、講師のかたわら商業音楽制作にかかわる。

1976年からは造園土木会社勤務を経て、国土修景等の企画設計管理事務所とRoom to Growを設立。音楽を中心にバレーや映像という総合芸術分野において、日米間でプロデューサーとしても活動する。

2007年カナダ・ブリティッシュ・コロンビア州・リッチモンド教育委員会の Representative に就任。学習プログラム設計に携わる。

2013年カナダ・ボドウエル・ハイスクールの official agent に就任。

教育委員会、宗教法人、学校法人、ハウスメーカー等顧問、アドバイザーに就任。

平成28年山名会歴史講演会

秀吉・家康期の山名禅高

華頂短期大学 伊藤真昭教授

(山名会活動記録のビデオより起稿)

はじめに

ただ今ご紹介に預かりました華頂短期大学歴史学科の伊藤真昭です。本日は全国山名氏一族会の総会に当たりまして、ご盛会誠にめでとうございます。この全国山名氏一族会の講演にお招きいただき誠に光栄に思っております。

私自身はプロフィールにありますように、豊臣政権下の京都のお寺について研究してきた訳でございますけれど、今まで色々な史料を見ている中で「禅高」という名前はよく見てはいたのですが、今回テーマを与えていただきまして、一度じっくりと山名禅高さんについて調べてみる機会を与えていただき、ありがとうございます。

今回、色々と調べてみたのですが、先ずは禅高について今までどういった研究があるのかといったところから話をさせていただきます。本日の会場受付でもおいてあります『山名豊国』という冊子がございます。

います。この冊子は今から40年以上前の昭和48年3月に刊行されています。小坂博之さんという方が執筆されたのですが、非常によく調べられている本で、今日の私の話というのは、このご本にどれだけのものを付け足せるかなという程度でございます。既にこの本の中で非常に詳細に禅高の生涯について書いていただいていますので、このご本をベースに話をさせていただくこととなります。小坂先生が執筆されていた頃にはまだ見られていない史料等を今の私たちは見ることが出来ますので、そういった史料を補足したり訂正したりしていきたいと思いますが、大筋の流れとしては、殆どこのご本の中に尽くされていると思います。

この『山名豊国』ですが、古本屋で買った時の値段が4500円でしたが、山名会では3000円で販売しています。1500円高く買ってしまったかもしれません。お買い得でございますので皆さんも今日宜ければお買い求めください。

さて、小坂先生のご本の中のはしがきにもこのように書かれています。「なお、山名氏が本領但馬を中心として、中世後期二百数十年余にわたり、周辺諸国に残した政治経済的、文化的、あるいは血縁的影響・意義は非常に大きい」次からが大事な所ですが、「しかし、その史料は殆ど煙滅・散逸し、室町期に成った『太平記』『明德記』『応仁記』などのいわゆる『戦記物』、その他史書、系図の類も必ずしも実体を伝えず、それらを基として著された近世の『史誌類』にいたっては、さらに良質な物とはいえず、これらを利用するためには、より良質の『当事者発券のいわゆる『古文書』、同時代人の日記いわゆる『古記録』類の一・二等史料―史料によって孝証しなす必要がある』と、このように書かれています。

私もこの姿勢に従って、江戸時代に作られた編纂史料は使わずに、同時代の人が書いた日記や古文書のなかに、どういったことが山名禅高について記されているのかというのを見ていきたいと思っています。ですので、非常に断片的にならざるを得ません。小坂先生もいわれているように、山名氏に関する史料が非常に少なく、色んな所に散逸しています。それらを全て網羅するのは困難ですので、本日のお話の範囲でご容赦願いたいところです。

それでは本日の使用史料の確認ですが、文章レジ

ユメが裏表のコピーで2枚ございます。それから、史料レジュメが裏表で1枚ございます。全部で3枚の資料があるかご確認ください。文章レジュメに従って進めさせていただき、適宜史料の何番をご覧くださいと申し上げますので、どちらも合わせてご参照いただければと思います。それでは本題に入ります。

今、申し上げましたように山名禅高さんという方が、信長・秀吉・家康期におられました、生き残って山名家そのものを伝えられました。その方についての研究は小坂博之先生の『山名豊国』という本に生涯にわたって記述されており、色んな史料を駆使して記述されており、山名豊国研究については今でもこの本がベースになるかと思っています。

もう一つ先行研究としては東京大学史料編纂所や国学院大学で教鞭をとられた桑田忠親先生が、「お伽坊主山名禅高」(『大名と御伽衆』)という文章を書かれています。このご本は出家して「お伽坊主」になつてからの山名豊国の記述でございます。記録に出てくる色んなエピソードを散りばめて文章を書かれています、本日はそういった記録やエピソードは使用いたしません。

ここで問題点としては、先ほども申し上げたように豊国に関する同時代の史料が非常に少ないという

ことです。豊国自身が書いた手紙などは吉川家文書に収録され活字として見ることが出来るのですが、それ以外にはなかなか豊国さんが書いたものが見つかりません。そこで色んな人が豊国さんについて書いたものを今日は集めて来て、そこから、秀吉・家康期の山名禅高さんのイメージを作っていきたいと思います。

使用史料

今日は秀吉・家康期と時期を区切っています。ですから信長期や鳥取城にいた頃のことにはあまり触れません。主に京都にやって来てからの禅高さんがどのような活動をしていたのかについて一次史料を元にお話をさせていただきたいと思います。

一次史料とはどのような史料かと申しますと、公家の山科言経（ときつね・1543～1611）の日記である『言経卿記』。相国寺の僧侶が書いた日記である『鹿苑日録』。あとは、『御湯殿の上日記』。これは御所に仕えている女官が天皇の状況を日々書き記した日記です。

そのほかに、『豊臣秀吉文書』。これは現在刊行中で豊臣秀吉が出した手紙を網羅した史料集で、全10巻の予定で現在まで第2巻目まで刊行されていますので、その範囲で禅高さんに関するものを拾いだ

しました。

あとは補助的に、編纂資料になるのですが、まず、ある程度信用がおけるものとして江戸幕府が各大名家に作らせて提出させた系図である『寛永諸家系図伝』と『寛政重修諸家譜』といった系譜類があります。また江戸時代中期、京都の名勝を案内したガイドブックである『都林泉名勝図会』と小瀬甫庵が江戸時代になって書いた秀吉の一代記である『太閤記』にも禅高さんの名が見えます。

そして下記のように、いくつか自分で設問を設定しました。

問① 禅高はいつ京都に来たのか。

問② 禅高はいつから秀吉に仕えたのか。

問③ 禅高はいつから家康に仕えたのか。

問④ 家康との主従関係ができたのはいつか。

問⑤ 文化人としての交友関係はどのようなものか。

問①から問⑤まで、自分なりに山名豊国さんについて史料からうかがってみたいと思います。

問① 禅高はいつ京都に来たか。

まず一つ目、山名禅高はいつ京都に来たかについてですが、鳥取城を豊臣秀吉が攻めて、山名豊国が降伏するわけですが、その後、彼はどのような

な行動をしていたのかというと、

「天正十年七月朔日紹巴禪高等山何百韻」(出典…国書総目録データベース)

という連歌の記録にヒントがあります。

国書総目録データベースで「禪高」というキーワードで検索をすると、日付が明らかなのに、天正10年(1582)7月1日に開催されたこの連歌会の記録があります。ここには里村紹巴(じようは)や山名禪高が参加しているので、里村紹巴がこの時期いったどこにいたのかがあれば、おのずと山名禪高の所在も明確となります。

そこで調べてみますと吉田神社の神主さんの日記である『兼見卿記』に天正10年(1582)6月9日に里村紹巴は京都にいますという記述があります。里村紹巴が余り動き回っていないとすれば、7月1日の時点でも里村紹巴が京都にいます可能性は高く、そう考えると山名禪高も京都にいたといえようかと思えます。

天正10年6月2日が本能寺の変ですから、本能寺の変の前から京都にいたのかは不明確ですが、この連歌の記録によれば本能寺の変の直後には山名禪高は京都にいた可能性が非常に高いと思われます。ですから鳥取城を明け渡したのが天正9年(1581)の4〜5月あたりですので、その後程なく京都

にやって来たのではないかと思われます。

それでは、鳥取城を明け渡して京都にやって来た山名豊国は、どんな活動を京都でしていたのか、羽柴秀吉とどのような関係を持っていたのか。というのをみていきたいと思います。

『寛永諸家系図伝』から見ますと、出家して「禪高」に改名した後、秀吉との関係については記載がありませんでした。『寛政重修諸家譜』(1812年に完成)は寛政年間に作成されたものですので、江戸時代でも大分新しい系図になりますが、そこには

「太閤幕下に属すべきのよしを誘ふといへども、旧家の故をもって固く辞し、同国村岡に蟄居し、後又摂津国多田庄にいたり、旧臣多田将監がもとに幽居す。十四年東照宮・・・」

とあり、秀吉の誘いを固辞し蟄居した、つまり秀吉には仕えていないと書かれてあります。

この『寛政重修諸家譜』の記述を信じるならば秀吉には仕えていないことになり、『寛永諸家系図伝』にも全く秀吉との関係は全く書いていません。しかし江戸時代作られた系図でもあり、もしかしたら秀吉との関係については意識的に抹消されている可能性もありますので、同時代の史料から見ていこ

うとなる訳です。

で、『太閤記』、これも江戸時代初めの作になりますので、同時代とはいえないんですけど、史料の①番をご覧ください。

史料①『太閤記』巻二十二

秀吉公御遺物、加賀大納言利家卿館に於いて

下さ被る覚え、帳面の如く之を写す。

一 遠浦帰帆 内大臣家康卿

一 金子三百枚 同

一 三好正宗 大納言利家

一 金子三百枚 同

一 捨子茶壺 北庄中納言金吾殿也

一 金子百枚 吉光脇指 同

一 枯木之絵 江戸中納言秀忠

一 雁之絵 会津中納言景勝

一 最巻なづな 備前中納言

一 七台 安芸中納言

一 国吉 岐阜中納言

一 吉広の刀かぶら 越中宰相利長

一 燕かぶらなし井わきさし 毛利宰相

一 則重 結城宰相

一 たいしや正宗同 丹後宰相

一 吉光同 大津宰相

金子三十枚

貞宗同

左ノ脇差

鎗しのぎ藤四郎わきさし

正宗

雪之絵

金子三十枚

同 三十枚

同 三十枚

同 三十枚

同 三十枚

同 二十枚

金子十五枚

同 十五枚

同 十枚

同 十枚

同 十枚

同 十枚

同 十枚

同 十枚

同 十枚

同 五枚

金子五枚

同 五枚

若狭少将

小松宰相

大崎少将政宗

伊奈侍従毛利河内守也

佐竹侍従

織田常真

織田有楽

同民部少輔穴津侍従

富田左近将監

宮部法印

有馬中務法印

桑山法印

羽柴下野守

兌長老相国寺

古田織部正

寺西筑後守

柘大炊助元尾州大山之城主なりき

稲葉兵庫頭

新庄駿河守

佐久間不干

奥平美作守

中川宗半ム

住吉屋宗務

- 一 同 五枚 山岡道阿弥
- 一 同 三枚 前波半入
- 一 同 三枚 江雪
- 一 同 三枚 **山名禪高**
- 常真叟よりは是まで二十二人は御咄の衆也。
- 一 金子三十枚 小出播磨守
- 一 同 三十枚 木下肥後守
- 一 同 二十枚 生駒雅楽助

文禄4年(1595)に「秀吉公御遺物、加賀大納言利家卿の館に於いて、下さるる覚え、帳面のごとくこれを写す」と、秀吉が亡くなりかけて、自分が持つているものを大名たちに分配する記事があります。その中で山名禪高さんはどこにいますかというところ、一番最後から4番目に、「(金子)同三枚、山名禪高」とあり、秀吉から形見分けに預かっています。その次に「常真叟(じょうしんそう)よりは是まで二十二人は御咄(おはなし)の衆なり」と書いてあります。常真は織田常真のことで、織田信長の息子、織田信雄(のぶかつ)という人です。秀吉が北条氏を滅ぼした後、秀吉は徳川家康を関東に移しました。その後、尾張の大名であった織田信雄を家康がいたところ(三河・遠江)に転封を命じましたが、信雄が拒否をして秀吉がこれに怒って改易にしたのです。

信雄は自分の主君の息子ではありませんでしたが、容赦なく改易して、その後は御咄衆、つまり御伽衆(おとしゆう)として秀吉に仕えています。

この織田常真(信雄)が金子30枚、信長の弟で利休の弟子でもあった織田有楽斎も30枚。そこからズーッと下ると、最後の3枚の人が3人いますけど、その中でも山名禪高が一番最後。つまり、禪高は22人いる御伽衆の中でも最もランクが低いということになります。『太閤記』の記述を信用するならば、秀吉に仕えていたことは仕えていたといえるのですが、序列としては一番下のランクということになります。

御伽衆とは、名前の通り話し相手になる方で、色んなことを知っている、色んな知識を持っている人で、武力で仕える人たちではありません。御伽衆の中には武士もいるのですが、例えば相国寺の僧である兌長老(たいちろうろう)や中川宗半・住吉屋宗務とかは武士ではありません。そういった色んな人たちが御伽衆には入っていますけれども、武力で仕えるということは期待されていません。

問② 禪高はいつから秀吉に仕えたか。

系図には秀吉のことは何も書いてないのですが、『太閤記』からは、豊臣秀吉に仕えていたらしいこ

とがわかりました。ではいつごろから禪高は秀吉に仕えていたのか、その他の記録から見ていきたいと思えます。

いつから秀吉に仕えていたのかということは、小坂先生の『山名豊国』にも、桑田先生の『大名と御伽衆』にも書かれていません。ここが私のオリジナルといえばオリジナルになるかなというところで、同時代史料を探してみますと、先ほどお話しした『豊臣秀吉文書』の中に収められている「天正9年（1581）11月4日付宮部継潤宛羽柴秀吉掟書」によれば、

「一、山名殿（禋熙）・禪高御兩人の儀は、その方覚悟次第に何方を以てなりとも、御知行あい定められ、馳走あり、備えの儀、その方きわにしかるべき事」

とあります。

何が書いてあるかといえば、豊臣秀吉が家臣の宮部継潤に宛てて、「山名二人には、お前の考え次第でどこでもよいので、領地を与えてやりなさい。」そして「備えの儀」とは軍備を備える訳ですが、「山名の二人は宮部継潤の傍に置いておきなさい」ということが書かれています。

つまり秀吉は天正9年（1581）11月4日の時点で、山名禪高は（秀吉家臣の）宮部継潤の配下にしてそのまま山陰地方の大名にしようとしていたことになりました。領地はどこか分かりませんが土地も宮部に適当な所を与えるよう、また軍議なども宮部の傍で仕えるようにと指示を出しています。この時点ではまだ秀吉の配下になっていません。大きな意味では配下に入っているのですが、直接秀吉に仕えている訳ではありません。

そして前述のように、天正10年（1582）7月1日には京都に來ているらしいので、このことからいきますと、秀吉が宮部に指示した通りにはなっていない。禪高は宮部継潤に仕えることを余り快く思っていないのかもしれない。

そして禪高は宮部継潤から離れて京都にやつて来て、天正10年7月1日には里村紹巴達と連歌会を催している。その後3、4年はどのように過ごしていたかは分からないのですが、史料の②番をご覧ください。

史料②『言経卿記』天正14年（1586）1月2日

一、梅庵由己亭にて和歌会始め之有り、おのおの出座の後、先ず下臈より懷紙之を置き、次に

当座一首、題を之れ取る、次に吸物にて一盞了んぬ、暮れ暮れに短冊を之れ置き、次に夕餐之有り、出題は冷泉也、(マ) 先ず文台に読師冷泉進まれましたんぬ、講師を召し、光珍進み出で了んぬ、次に読揚げ了んぬ、上首懷紙五六首計り講せられた了んぬ、発声は冷泉也、次に短冊之を読み、終わって退き了んぬ、次におのおの帰宅し了んぬ。

今日の人数、俗衆は予・冷泉・四条・橋本・

亮熙山名慶五郎
但馬國・古継関白殿御内
薄田伝兵衛尉・新栄同
三上越前守・真継(後出真隆)

加陽伊右衛門尉等、僧衆は**禅高**山名伊与守入道
因幡國・紹空凌雲軒
本願寺内医者

・由己梅庵
殿下内・半入佐久間与
六郎入道・青筠当津者・光珍日取者
殿下内・

相春富島入道・無由(マ)・喜運医諸
三条島(丸脱力)
町者也等

也、当座の時に加わる衆は、秀隆(マ)・清

忠(マ)・久綱(マ)・等也、予今日の歌は

此の如し

『言経卿記』(ときつねきょうき)の天正14年(1586)1月5日の日記には「梅庵由己亭にて和歌会始めこれあり」と、御伽衆の一人である大村由己邸にて、和歌会始が興行されました。この日記中に、「(山名) 禅高 山名伊与守入道、因幡国」、「(山名) 亮熙 山名慶五郎、但馬国」とありますので、この二人は天正14年の時点では確実に京都にいたことになります。これは山科言経が日記に記しているのだから、まず間違いない。そして参加者の中に「古継」という人がいますが、この人には「関白殿御内」と説明書きがあります。これは関白秀吉の家臣という意味です。しかし山名禅高の所には関白との関連について何も書いてありません。ですから天正14年1月の時点では、山名禅高は豊臣秀吉の家臣には未だなっていないと考えてもよいのではないでしょうか。

次に、史料の③番をご覧ください。

史料③『言経卿記』天正14年(1586)6月1日

一日、乙丑、天晴

一、小川善大夫上洛の間、永運方へ返事を遣せ

了んぬ、

一、山名伊与守入道（尊国）禪高亭にて、早旦より法楽連歌

会之れ有り、おのおの同道罷り向かい了んぬ、

人数、予・（羽樂秀吉）禪高（殿下御内）・頼純（大村殿下御内）・由己（山名与州入道）

・半入（佐久間子六郎）・古継（薄田伝兵衛尉）・長治（平野右京亮）・

光珍（山名内）・成安（江）・真隆（同）・養云・祐恵（加陽伊右衛門尉）

堀衆・、執筆等也、終日済々の儀也、

茂りゆく、ことの深し、夏の山 禪高

庭にすずしき、松の下水 予

以下之れを記すに及ばず、酉の刻に帰宅し了

んぬ、

『言経卿記』の天正14年6月1日の日記には、

2行目の一つ書きのところに、「山名伊与守入道禪高亭にて・・・」と書いてありますので、京都に禪高の屋敷があったということがわかります。これがどこにあったかわかればよいのですが、それを示すような記事はありません。しかし京都に屋敷を持っていたことは明らかです。

さらに日記には、山名邸で「早旦より、法楽連歌会之れあり、各同道罷り向かい了んぬ」と、早朝よ

り法楽連歌会が催され、山科言経も同道してそこに行きました。参加者の記述のところで禪高について、「山名与州入道」とあって、その肩書きのところに注目してもらいますと「殿下御内因州」と書いてあります。先程の1月5日の時点では何も書いてないのが、6月1日のところには「殿下御内」と書いてある。つまり1月から6月の間に、禪高は豊臣秀吉に仕えるようになったといえるんじゃないかと思われま

す。もう少し読み進めますと、山名禪高の家臣も居て「山名内、成安 同じく真隆、加陽伊右衛門尉」と、「成安」と「加陽伊右衛門真隆」といった二人の家臣もこの法楽連歌会に参加していたことがわかります。そして禪高の詠んだ和歌も書いてあります。禪高が「茂りゆく、ことの深し、夏の山」と読めば、山科言経が「庭にすずしき、松の下水」と詠んでいます。

問③ 禪高はいつ徳川家康と関係を持ったか。

その他にも色々と山科言経と山名禪高との関係がその後も続いています。例えば史料⑤番を見ると、文禄2年（1593）に「江戸亜相」（えどあしやう）つまり徳川家康の名が見えます。ここで始めて徳川

家康と山名禪高との関係も出てきます。史料の④番は、『鹿苑日録』という日記の慶長2年(1597)10月1日付けの記事ですけれど、今まで小阪先生とか桑田先生が徳川家康と山名禪高との関係がうかがえる最初の史料だといわれていたものです。

史料④『鹿苑日録』慶長2年(1597)10月1日

十月

朔日。隻樽・両種能智之を恵む。齋了んぬ。伏見より迎三人来たる。当寺常住は兩人之を倩やとう。伏見に赴く。晩に及び江戸内府に到る。金法・浅弾・有楽・**禪高**・有法相会す。太平御覽廿五冊城織部に渡す。史記抄十八冊城織より来たる。残りは一冊なり。

これを見ますと2行目に「伏見に赴く、晩に及んで江戸内府に到る」とあります。江戸内府とは徳川家康のことで、相国寺のお坊さんが伏見の徳川家康の屋敷に行き、その場で、金法(金森法印)・浅弾(浅野弾正)・有楽(織田有楽)・禪高(山名禪高)・有法(有馬法印)と会ったと書いています。

今まではこの慶長2年(1597)10月1日の

史料④番が徳川家康と山名禪高の出会いを示す最初の史料といわれていたのですが、史料の⑤番は慶長2年よりも前になります。

史料⑤『言経卿記』文禄2年(1593)9月21日

一、江戸垂相へ罷り向かい了んぬ、柳原・**山名入道**(豊国)

禪高・浅野(長吉、のち長政と改む)・弾正等同じく罷り向かわれた

んぬ、夕餐相伴了んぬ、碁之れ有り、見物了んぬ、

文禄5年(1596)が慶長元年になりますので、文禄2年(1593)に徳川家康と禪高が出会っていたとすると、これまでいわれている慶長2年(1597)よりも4年ほど遡る記録になります。

史料の⑤番では、山科言経が徳川家康のところにいった時、そこには柳原というお公家さんと山名禪高・浅野長政等がいて、夕食も共にして、その場に居たものが碁を打っていたことがわかります。

次に文禄3年(1594)の5月4日の記事を見えます。

史料⑤『言経卿記』文禄3年(1594)5月4日

四日、壬午、天晴

(中略)

一、江戸亜相へ罷り向かうの所に、吉田三位(兼見)の所

へ御出なりと云々、昨日より予は同道(由脱か)の之有

るの間、跡より則ち罷り向かい了んぬ、相伴

衆は、亜相・予・柳原(淳光)・亭主・幽齋・山名

禪高(豊四)、其の外碁打ちの物、以上十五六人之れ

有り、鯉包丁幽齋沙汰し了んぬ、見事なり、

終日種々丁寧の儀なり、大系図之れを見る、

暮れ暮れ予計り帰り了んぬ、路遠きの間此の

如くなり

山科言経が徳川家康のところに出向いた際、徳川家康は吉田兼見の所へ出かけていた。言経は同道するよういわれていたので、後から吉田兼見の所に行った。その場にいた人は、徳川家康と山科言経と柳原淳光と吉田兼見、細川幽齋、山名禪高がおり、その他には碁打ちの者が何人かいて、都合15、6人はいた。ここでもまた碁が行われているということになります。このように徳川家康と山名禪高との

関係は、碁や後で出てきます将棋とか、そういった文化的な交流をしていたことがわかります。

史料⑤『言経卿記』文禄3年(1594) 5月6日

一、知恩院へ江戸亜相御出での間、来るべき由石

河日向守昨日より相催しなり、又知恩院より

も石日向守へ言伝として来るべき由之れ有る

間、私宅より直に罷り向う、日向守の家(寺の辺に之れ有り)

に先ず立寄り了んぬ、茶飲の休息し了んぬ、

次に柳原・月斎等来られ了んぬ、次に寺僧の

芳胤の処へ罷り向い、両三人で茶之れ有り、

次に寺の奥一寺へ罷り向う、数刻待ち申す処、

小食之れ有り、次に未の刻に亜相知恩院へ御

出の間、迎えに罷り向い了んぬ、次に相伴し

了んぬ、亜相・柳原・予・寺住(浩普庵甫)・同弟子・

山名禪高・月斎・宗カツ・了頓等なり、濟々

の儀なり、酉の下刻におのおの御帰り畢んぬ、

予は暮を過ぎて帰宅し了んぬ、

次の文禄3年（1594）5月6日の記事を見てみると、知恩院に徳川家康がお出ましになるので山科言経も来るように、石川日向守より昨日誘いがあつた。本日、皆さんも先程参拝された知恩院に徳川家康も来て、どんな人たちが共に来ていたというと、亜相（徳川家康）、柳原淳光、山科言経、知恩院住職、住職の弟子、次に山名禪高と書いてあつて、月斎、宗カツ、了頓等、立派な人達が来ており賑やかにしていました、と書いてあります。

ですから山名禪高も本日皆さんが参拝された知恩院にやつて来ていたということがここで分かります。今日は知恩院のお膝元でお話させてもらうので、何かよい記事が無いかと探していたのですが、丁度、知恩院に山名禪高と徳川家康がやつて来たという記事があつて、これはここで紹介する意味があつたなと感じています。

今日、知恩院に参拝されましたが、工事中のところは御影堂で、そこは江戸時代になってから建てられたものです。我々が今いるこの辺り（華頂大学）も、江戸時代になってから知恩院の敷地になりました。文禄3年段階の知恩院というのは知恩院の一番上の勢至堂が西暦1530年に建てられたもので、そこが元々の知恩院の場所なのです。

ここからも見える国宝の三門は徳川秀忠が建てた

もので、今我々がいるこの辺りは江戸時代以前は知恩院の境内ではなく、他のお寺が建っていたところだったんです。当時の知恩院は山の中腹にちっぽけに建っているお寺だったんです。そこに徳川家康と山名禪高は行ったんです。本日知恩院参拝で歩まれた道を山名禪高も歩かれた訳ですね。徳川家康が將軍になってから、家康は浄土宗の檀家なので自分の菩提寺としてこの知恩院を大拡張した訳です。この大拡張で、下の方にあつたお寺は強制撤去し谷も埋め立てて御影堂をたてました。お寺をどかした所には知恩院の塔頭寺院を建てました。今我々がいる三門より下の辺りが下段。御影堂の辺りが中段。上段の勢至堂が元々の知恩院の場所です。

江戸時代以前の知恩院は現在の規模に比べると非常に小さいお寺で、そこに徳川家康と山名禪高さんたちが集いお茶を嗜んだり、色々と文化的なお遊びをされていた。

史料⑤『言経卿記』文禄3年（1594）5月8日

一、江戸亜相へ罷り向うの処に、早や相国寺へ御出なりと云々、則ち罷り向い了んぬ、辰の下刻なり、内々の約束に依つて罷り向い

了んぬ、相伴の衆は亜相・柳原・予・
長 老・山名禪高・薺首座・月斎・永仁(西笑承兌)
(藤原愔高)
(宋任)
(龜屋)

等なり、朝飡之れ有り、水セン・夕飡等之
れ有り、濟々の儀なり、酉の下刻に予は帰
宅し了んぬ、亜相以下は未だ暮之れ有り、

さらに見ていきますと翌々日には、徳川家康が相
国寺に行きました。相国寺に行ったメンバーの中にも
山名禪高が入っています。

史料⑤『言経卿記』文禄3年(1594) 10月22日

一、江戸亜相へ罷り向い対顔し了んぬ、夕飡相伴
し了んぬ、柳原・山名禪高(豊国)、其の外に四五人
之れ有り、

また同じ年の10月には、徳川家康邸で山名禪高
たちが夕食を共にしています。

史料⑤『言経卿記』文禄3年(1594) 11月1日

一、江戸亜相へ礼に罷り向かい了んぬ、対顔を了

りて、暮・将某之れ有り、見物了んぬ、高若
来たり了んぬ、和田酒盛之れを舞う、夕飡之
れ有り、相伴亜相・勸修寺・予・冷泉(晴豊)
(政宗)
(光豊)
(資淳)
(言経)
侍従・勸修寺 弁・柳原 弁・阿茶丸・山名
禪高(豊国)・山岡八郎衛門尉、其外大勢之れ有り、
(景友)
飡の已前に 柳・山形父子・富田子・等
なり、

さらに11月1日には徳川家康のところへ碁や将
棋や幸若舞がありました。それを見物したりさまざ
まな文化的な遊びを行っています。徳川家康や伊達
政宗やお公家さんの中に混じって山名禪高の名が確
認できます。

史料⑤『言経卿記』文禄3年(1594) 12月2日

一、江戸亜相へ罷り向い、柳原(景光)と雑談し了んぬ、
後刻に柳原次男(秀光)、日野町の跡目に成られたん
ぬ、衣冠にて亜相へ太刀にて礼を申され、盃
酌之れ有り、去る廿六日に元服、十一才、宮
内権大甫秀光なりと云々、(やがて) 聴き帰かへられたんぬ、

次亜相已下広間へ御出の間、予亦た罷り出で
了んぬ、碁・将某之れ有り、夕餐之れ有り、

亜相・柳原・予・**山名禪高**・細川幽斎・

(津輕篤信)
ツカル、其外四十余人相伴し了んぬ、

同じく12月2日に徳川家康の所に行きますと碁
とか将棋がありました。夕食もだしてくれました。
山名禪高とか細川幽斎とかその他40名位の人がそ
こに一緒に居られました。

このように、慶長2年(1597)以前より非常
に頻繁に徳川家康と山名禪高が遊んでいることが山
科言経の『言経卿記』からわかります。

ですから問いの③ですが、いつから徳川家康と関
係を持ったかといいますが、慶長2年(1597)
よりも先に家康との関係が見受けられます。一番早
いのが文禄2年(1593)です。天正年間には確
認できていないのですが、文禄年間(1593頃)、
つまり秀吉が隠居をして、関白を甥の秀次に譲って
から家康と禪高が会って頻繁に主に将棋や碁で、
遊んでいる様子がわかります。その他『鹿苑日録』
の慶長2年(1597)4月4日の所を見ますと、
安威了佐のところで、相国寺の禅僧西笑承兌と禪高
が食事に招かれる。了佐が藤原定家の掛け軸を見せ

るのですが、その定家の色紙を禪高が欲しがったと
いう記事があります。これからも禪高の文化的な側
面が見受けられます。

というところで豊臣秀吉期の禪高のまとめをいたし
ますと、秀吉が慶長3年(1598)に亡くなりま
す。最初に説明しました『太閤記』の形見分けでも
金子三枚を貰うメンバーが入っているので、最後ま
で秀吉の家臣で御咄衆の一人であったことは明らか
ですけれど、いったいどんなことをしていたのか？
という、秀吉との関係を示す史料は見受けられませ
んでした。むしろ徳川家康邸で将棋を共に指すよう
な文化サロンのメンバーとしての禪高の姿がうかが
えますけれど、この時点では禪高は秀吉の家臣であ
り、家康の家臣ではありません。主従関係はない文
化的な遊び友達というか、碁や将棋を指す仲間とい
うことになります。

問④家康との主従関係ができたの はいつか。

では、いつ家康との主従関係が出来たのでしょうか？
か？ということを見ていきますと、『寛永諸家系図伝』
では関ヶ原の戦いの後、竹田城の受け取りの後の慶
長6年(1601)4月19日に6700石を家康
から家臣の名で与えられています。

『山名豊国』の本では、「この豊国は七美郡知行は慶長六年四月十九日以前に家康より朱印状が交付されていることが判る。「重ねて仰せ付けらるべし」とあるからで、これ以前に豊国は七美郡を知行していて再び安堵されたものである」とあるのですが、こは少し訂正しなければなりません。

というのは関ヶ原の戦いで徳川家康は石田三成と戦ったのですが、これはあくまでも豊臣政権内での権力争いなんですね。秀吉の子の秀頼と家康が戦ったわけでなく、家臣間のいざこざです。ですから家康は豊臣政権の長老の立場で家臣に土地を与えられません。与えられるのは秀頼しかいないんです。ここで家康が自分の名前で家臣に土地を与えたとなれば、これこそ大問題になってしまう。秀頼がいるのに何を越権行為をしているんだと、いうことになる。家康は家臣の名前でしか大名達に土地を与えられなかったのです。

「重ねて仰せ付けらるべし」の「重ねて」を小阪先生は「二回目」と解釈されていますが、本来は「また後で」という意味なんです。つまり、後で重ねて家康から朱印状を出しますという意味なのですが、結局、秀頼がいる間は朱印状が出されることは有りませんでした。

それぐらい家康は秀頼に非常に気を遣っていた。

しかし、実質的には家康から領地を与えられていたということになります。ですから、この時点で初めて家康との主従関係が発生することになります。役割としては秀吉の時と同じように御伽衆の一人です。次に史料の⑥を見て下さい。『鹿苑日録』の慶長18年(1613)2月10日の条です。

史料⑥『鹿苑日録』慶長18年(1613)2月10日

十日。早朝道春私宅に到り礼を伸ぶ。板物一端を遣す。帰りて水無瀬一斎老の宅に到る。同途して村越茂介殿に到り礼を伸ぶ。板物一端を呈す。・・・(中略)・・・次に**禅高**に到り礼を伸ぶ。踏皮五足を呈す。**禅高**出接して吸物を以て見て酒を侑む。床に一休達磨賛有り。

これは相国寺のお坊さんが駿府に行った時の記録です。駿府に行った時に禅高邸を訪れています。山名禅高の家に行つて、御礼をいって足袋五足を献上しました。で、山名禅高と出会ってお吸い物とかお酒を戴きました。そうしたら床の間に一休が書いた達磨大師の讃が掛かっていた、ということがこの日記に書いてあります。つまり駿府に山名禅高の屋敷

があつたということがわかります。

慶長18年(1613)には徳川家康は江戸幕府の大御所として駿府にいます。江戸には2代将軍の秀忠がいます。ですから秀忠に仕えているのではなく、家康に仕えていて駿府に屋敷を持っていて家康の側近くに仕えていたことがわかります。

その他、大坂冬の陣の時に、山科言緒(ときお)という言経の息子が、住吉に出陣している徳川家康に陣中見舞いをしたところ、禪高にも会っています。ということは山名禪高も住吉にいたことを示すのが、史料の⑦になります。

史料⑦『言緒卿記』慶長19年(1614) 12月5日

未五日癸。天晴

一、前大樹様^(徳川家康)へ御目見え申す、進物六条中納言毛氈二枚、冷泉中納言ユカケ十具、予毛氈二枚

なり、

・・・(中略)・・・

一、前大樹御息宰相殿・同中将殿今日住吉より天王寺へ御陣替なり、

一、城和泉守^(昌茂)へユカケ式具持参、同道日野入道大

納言・六条中納言・冷泉中納言・予等なり、

晩餐あり、風呂あり、次に數寄あり、万歳と云葉茶壺・茶入・万の道具来らる、今度うち死致すべきの間、持ち来たるの由雜談之れ有り了んぬ、

一、山名禪高^(豊高)へ罷り向かい了んぬ

このように慶長19年(1614)の12月5日に山科言緒は山名禪高の所にも行っています。

史料⑧『言緒卿記』元和元年(1615) 5月1日

一、前大樹^(徳川家康)へ出でらる衆、大炊御門大納言・廣橋

大納言^(兼勝)・三条大納言^(三條西實條)・日野大納言^(資勝)・六条

中納言^(佑廣)・飛鳥井中納言^(雅廣)・廣橋中納言^(徳光)・冷泉

中納言^(爲満)・大徳寺中納言^(實久)・今出川中納言^(宜季)・西洞

院宰相^(時慶)・土御門左衛門佐^(久磨)・予・花山院少将^(定好)・

烏丸弁^(光賢)・柳原弁等也、

一、院参仕る、西洞院宰相^(西洞院時直)・同少納言^(天海)・南光坊・

山名禪高^(豊高)参られ、御振る舞いあり、

史料の⑧をみると、大坂夏の陣の時に、山科言緒が二条城の徳川家康の所に挨拶に出向きます。その後、後陽成院の御所に行くとは禪高もやって来て、そこで御振舞があつたということですが、ここが大事などころだと思ふんですが、つまり天皇ではないのですが、後陽成上皇の御所に山科言緒が行つたら、そこに禪高がやって来たというのです。つまり秀吉の時には先ほどの『太閤記』の形見分けの所を見ると、御伽衆の中でも最もランクが低い人でしたが、それが大坂夏の陣の時には、後陽成上皇と場所を共にする程の人になつていたということがわかります。ここでのまとめとして、家康期の禪高というのは、御伽衆というより文化人としての側面が強いなと思われまふ。文化人としては身分の差も超えて、交友範囲が広がって後陽成上皇まで繋がっていきます。

問⑤文化人としての交友関係は？

史料⑨『時慶記』慶長5年（1600）4月3日

三日天晴、未明に起き、宿酒、山岡道阿弥（景本）へ人を遣す、連歌会へ出座、申の刻に果てる、会席

は丁寧の儀なり、

連衆十三人、近衛殿（信尹）・一条院殿（尊勢）・山名禪高（豊国）・

比良大炊入道・東条紀伊守（行長）・江雪斎（岡野融成）・三上越

前守・三好助兵衛・光珍・中沼与作・加古勘

左衛門尉・亭主・某以上、会果てて伊達正宗

来たり入り、振舞に逢う、酒数盃なり、果て

て魚の類いなり、夜深まつて退散、烏弁（烏丸光広）八宿

へ下着、早く枕を取られ候、会の後に誹諧あ

り、京より乗物二人して下着す

文化人の交友関係をもう少し見ていきますと、史料の⑨番『時慶記』慶長5年（1600）4月3日条には、山岡道阿弥邸で連歌会が開催され、出席者に山名禪高の他には、近衛信尹（のぶただ・近衛家当主）・一乗院門跡尊勢がいます。翌々日の4月5日には近衛信尹が桑山重晴邸の茶会に行く際には山名禪高も同伴しています。

史料⑩『鹿苑日録』元和8年（1622）3月19日

十九日。山禪高来臨の故。八条殿において御

能有り。予亦詣りて之れ見る。一条殿白諸兩樽・両肴を賜う。

少し飛ばしますが、史料の⑩番『鹿苑日録』元和8年（1622）3月19日条に「山（名）禪高来臨の故、八条殿において御能あり。」と書いてあるのです。

八条殿とは後陽成天皇の弟宮である八条宮智仁（としひと）親王で、桂離宮を作った親王なんです、勿論天皇の弟宮で位がかなり高い位の人なんです、その人が山名禪高がやって来たので、能を開催した。つまり禪高がやって来なかったら能はなかった。禪高は八条殿と非常に親しくて、山名禪高がやって来たときに、「お能でもやりましょうか」といって能を催したということになります。近衛信尹との関係といい、八条殿との関係といい非常に高貴な方との接点があることが、うかがえます。

次に『御湯殿上日記』 慶長15年（1610）8月8日条には、

「やまなせんかう、あさくらさんせうしん上申さるゝ。こんゑ殿よりひろうあり」

とあります。つまり、山名禪高が朝倉山椒を後陽

成天皇に進上したということです。直接山名禪高が御所にいったかどうかは不明ですが、その時に披露したのは近衛信尹でした。近衛信尹と山名禪高は非常に仲がよく、その文化的な繋がりを利用して、山名禪高が後陽成天皇に朝倉山椒を献上したということがうかがえます。

おわりに

秀吉没年時には御咄衆でも最下位の位置づけであったが、年齢もかさね人脈も広がるなかで、家康期には文化サロンのなかでも禪高はかなり高い地位にあつたと思います。

最後に若干の補足ですが、『都林泉名勝図会』の中に妙心寺鐘楼にかかる釣り鐘の銘文が紹介されています。妙心寺の東林院というのは山名禪高の肖像画がある山名家の菩提寺的なお寺ですが、その鐘が山名禪高と非常に所縁が深い鐘であると書かれています。

その銘文には、

「清和天皇十代、山名氏義範公の後裔十六代豊国公、法名禪高、其の仲子豊義公、其の阿娘天祥院殿茲雲妙大、その慈母は木曾氏也、妙大、有為の財を以て、無為の果を修し、巨

鐘を鑄して、用いて吾山に寄付せんと欲す。」

とあります。

ここで山名禪高の名を出してくる訳ですが、没後50年程の時代においても、禪高の山名家における位置づけが大きいことを示すものです。孫娘にとつても非常に大事なお祖父さんであつた。そのために妙心寺に鐘を寄進したということが『都林泉名勝図会』からも拾い出せるほど、豊国（禪高）さんという方は、文化的な面において大きな役割を果たしてきたということが、史料などからうかがえるのではないかということを指摘して、本日のお話のまとめとさせていただきます。

質疑応答

先生、貴重なお話をありがとうございました。あまり時間のない状況ではございますが、ご質問についてお一人だけお受けさせていただきます。どなたかご質問ありませんでしょうか？

聴講者…「武将としての山名禪高の評価はどうだろうか？」

伊藤先生…武将としての評価は余り高いとはいひにくい。というのは、秀吉と戦うなどしたわけだが、最後まで自分の城を守りきることが出来なかつた、

その後の生き残りとしては、自分で刀を振り回して生きて行つたということではなくて、文化的な面での後の道を切り開いたということで、人を殺さずにして、その後の山名家を存続させたという点については高く評価出来るのではないかと思います。人を殺してドンドン領地を広げて大きくなりましたということではないという生き方を選ばれたのではないかなと思います。

平成28年山名会歴史講演会（H28年11月13日）にて

伊藤真昭教授プロフィール

大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了博士（文学） 日本史・仏教史・浄土宗史専攻 華頂短期大学教授

京都の寺社が織豊政権とどのように向き合つたのかを研究しています。また最近では浄土宗の歴史、特に江戸時代に寺請制度などによって民衆に浸透した仏教に対して住職がどのような役割を果たしたのかに興味を持っています。

『京都の寺社と豊臣政権』（法蔵館）、『近世の相国

寺』（相国寺教化活動委員会）、『伊賀市史』、『愛知県史』、『甲賀市史』、『日野町史』など

「近世浄土宗寺院における本末・寺檀関係と住職の異動―近江湖南地域を素材にして―」、『佛教文化研究』55号、2011年3月「醍醐本法然上人伝記の伝来について―なぜ醍醐寺に伝わったか―」、『佛教文化研究』53号、2009年3月「戦国・織豊期の天龍寺諸塔頭について」原田正俊編『天龍寺文書の研究』、思文閣出版、2011年5月「妙心寺の経済力と秀吉の戦争」、藤田達生編『近世成立期の大規模戦争』、岩田書院、2006年4月「中世浄土宗教団の特質―「祈禱」を手がかりにして―」、『仏教文化研究』50号、2006年3月他多数



「秀吉・家康期の山名禅高」伊藤真昭教授（平成28年11月13日）

平成29年山名会歴史講演会

山名宗全の虚像と実像

国際日本文化研究センター 呉座勇一先生

(山名会活動記録のビデオより起稿)

ただ今ご紹介に預かりました呉座です。この度は山名会講演会でお話しさせていただくということで、大変に光栄に思っております。本日は「山名宗全の虚像と実像」という演題で応仁の乱と山名宗全の関りについてお話ししたいと思います。

山名宗全のイメージ

さて、山名一族と言いますと、一般的に一番有名なのは山名宗全だと思います。山名宗全というのは皆様ご存じのように、応仁の乱。応仁の乱は東軍と西軍に分かれて戦ったのですが、東軍の総大将が細川勝元、西軍の総大将が山名宗全ということになります。宗全は本日の会場があるこの西陣通りに陣を構えて戦ったということになります。

そんな山名宗全ですが、実は宗全が活躍していた室町時代やその後の戦国時代のもので宗全を描いた肖像画というのには残っておらず、江戸時代以降の物しか残っていません。

では、実際にどんな物が残っているかと言いますと、これは『山名宗全細川勝元確執之図』(図1)という錦絵で、そこに山名宗全が描かれています。鳥取市の歴史博物館が持っている応仁の乱に関する錦絵です。実は私、(平成29年)11月に鳥取で講演したのですが、その時に鳥取市歴史博物館の方とお話ししたのですが、最近この絵の問い合わせが非常に増えていて、写真を使わせてもらえないかと



図1 山名宗全細川勝元確執之図
(鳥取市歴史博物館蔵)



図2 『本朝百人武将伝』
(国立国会図書館蔵)

いう問い合わせが沢山有つて、急に有名になつたといふことです。

もう一つは、これも江戸時代のもですが、国立国会図書館が持つている『本朝百人武将伝』(図2)といつて、つまり日本の有名な武將を百人集めて、その人たちの紹介や説明をしている本ですが、その日本を代表する有名な武將百人の中の一人として、山名宗全が選ばれていて、宗全の絵が描かれています。

しかし、何れの絵も江戸時代に描かれたもので、山名宗全その人本人を見て描いたものではないので、当然、想像で描いているのですが、江戸時代の人から見ても山名宗全という人は非常に強面な、ちよつと悪い感じの人というイメージであつたことが分かるかと思ひます。

『塵塚物語』の逸話「山名宗全、或る大臣と問答の事」

そのほかに、宗全の人物像を物語るエピソードとして有名なのは、お手元の資料の最初のページに載せましたが、『塵塚物語』という史料に書かれたものです。戦国時代の天文21(1552)年に作られた本なので、これも応仁の乱の勃発から90年近く経つてから書かれた本ですが、全6巻65話の一番最後に山名宗全に関するエピソードが載っています。

それは、「山名宗全、或大臣と問答の事」というエピソードですが、

「山名金吾入道宗全、いにし大乱の比をひ、或大臣家にまいりて、当代乱世にて、諸人これにくるしむなど、さまざまものがたりして侍りける折ふし、亭の大臣ふるき例をひき給ひて、さまざまかしこく申されけるに、宗全たけくいさめる者なれば、臆したる気色もなく申侍るは、『君のおほせ事、一往はきこへ侍れど、あながちそれに乗じて例をひからせらるる事しかるべからず。凡そ例といふ文字をば、向後は時といふ文字にかへて御心えあるべし。それ一切の事はむかしの例にまかせて何々を張行あるといふ事、此宗全も少々はしる所也：(中略)凡そ例と云は其時が例也。大法不易、政道は例を引て宜しかるべし。其外の事、いささかにも例をひかるる事心えず、一概に例になづみて、時を知らざるゆへに、あるひは衰微して門家とぼしく、あるひは官位のみ競望して其知節をいはず、此くの如くして終に武家に恥かしめられて、天下うばはれ媚をなす。若しみて古来の例の文字を今沙汰せば、宗全ごときの匹夫、君に對して此く

の如く同輩の談をのべ侍らんや、是はそも古
来いづれの代の例ぞや、是則時なるべし…（中
略）いまよりのちはゆめゆめ以てこころなき
急びすにむかひて、我方の例をのたまふべか
らず。もし時をしり給はば、身不肖なりと云
ども宗全がはたらきを以て尊主君公みな扶持
したてまつるべし』と苦々しく申ければ、彼
大臣も閉口ありて、はじめ興ありつる物がた
りも、皆いたづらに成けるとぞ、つたえきゝ
侍し、是か非か」

『塵塚物語』

《大意》

山名宗全は応仁の乱の頃にある大臣の邸に行
つて、昨今世が乱れている事について語った
事が有つて、大臣の方は「昔はこんな事が有
った。」「あんな事が有った」「昔の例によれば
こうだった」と色々と賢く語つたが、それに
対して宗全は、まあ、あなたの言っているこ
とも分かる。しかし、たしかに一理あるのだ
けれども、昔はこうだったというのは良くない。
これからは昔の「例」ではという言葉に
代えて、「時」という言葉を使いなさい。「例」
と言つてもそれは其の時の例で、昔の例が今
の世の中にそのまま通用するということでは無

い。あくまで其の時の例であつて、時代が変
わつて社会が変わつたら、そんな物は意味が
無くなるのだ。だから例にばかり拘るべきで
は無い。あなたたち、即ち公家貴族たちはそ
う言つた時代の変化というものをきちんと認
識せず例にばかりとらわれていたから、武
士に天下を取られてしまつたのでしよう。そ
もそも私（山名宗全）のような身分賤しき武
士が、大臣と対等に語り合うということが昔
は有りましたか。そんな例は無いでしょう。
これこそが時というものです。もう例に拘る
のは、やめるべきです。あなたが現実を見て、
今現在の世の中の流れに適応しようとするな
ら、わたくし宗全があなたをお助けしましよ
う。と言つて、完全に大臣の方がやり込めら
れてしまい、大臣は黙りこくつてしまつた。

これは有名な逸話でご存じの方も多いですが、こ
こで描かれている宗全は、昔の例やしきたり、秩序
やルール等はどうでもよく、今現在の時代に適応す
ることが大事であり、旧来のしきたりに縛られない
変革者のイメージが強く出ています。

勿論、これは宗全が死んでから何十年も経つてか
ら出来た本に書いてある話なので、これが本当の話
かどうかは分からないのですが、少なくともこの本

が成立した戦国時代の人たちは、山名宗全というのは旧来のしきたりとかルールに拘らない人だと思っていた。

「赤入道」

もう少し宗全が生きていた時代に近いもので、山名宗全についてどのように言っているかというと、資料にあるように宗全は「赤入道」とあだ名されていたようです。

『続郡書類従』の「山名系図」には、

「宗全の面色、甚だ赤し。世人呼んで曰く、

赤入道」

というように書いてある。それから、応仁の乱について書かれた軍記物である『応仁別記』の中では、細川方が山名の邸に矢文を打ち込んで山名を挑発するのですが、その文面には

「ウテナクハ ヤメヤ山名ノ赤入道 手ツメ
ニナレハ 御所ヲ頼ヌ」、

つまり、

戦う気が有るなら出てこい。戦う気が無いなら諦めて降参しろ。宗全は困ったら將軍に助けを頼む腰抜けなのか。

と挑発をしている。

ここでも山名の赤入道という言葉がでてくる。やはり宗全は赤入道と言われていたようですね。

更に一休宗純が作った漢詩集の『狂雲集』には、

「山名金吾は鞍馬の毘沙門の化身、鞍馬の多門は赤面顔」

山名宗全は武神である毘沙門の化身であり、やはりここでも山名宗全は顔が赤いということが書かれている。

これは単純に見た目が赤ら顔と言いたいのではなく、恐らく直ぐに怒る人であるということを言いたい訳です。短気で直ぐに怒るおっかない宗全のイメージがあつたのでしょう。

実力主義者・秩序破壊者というイメージ

今まであげた例は宗全が死んでから書かれたものの例なのですが、では宗全が生きている間はどのように言われていたのか。

それが分かる史料が万里小路時房という貴族が書いた『建内記』という日記です。応仁の乱の時の室町幕府の將軍は8代將軍・足利義政、この義政のお父さんは6代將軍・足利義教という人なのです。応仁の乱から遡る25年程前のことですが、この足利義教が嘉吉元年（1441）の嘉吉の変で、赤松満祐に殺されてしまいます。

幕府は將軍を殺した赤松満祐を成敗するために討伐軍を組織するのですが、その赤松討伐軍の主力となつたのが山名宗全でした。しかし、赤松討伐を命

じられた宗全はなかなか京都から出陣しようとし
ない。しかも山名宗全の家臣たちが、戦の為の軍資金
が必要だと言って、京都の土倉（金融業者）に乱入
して金や物を奪っていくという事件を起します。

その事について書いているのが、『建内記』の嘉吉
元年七月十二日の条ですが、

「山名の濫吹、以ての外の次第なり。管領（細
川持之）より度々濫吹を止むべきの由、使を
立つるの処：（中略）更に制止の下知に及ば
ざるなり：（中略）所詮山名の許に寄すべき
の由、管領支度の処、今夕の儀、被管人無道
の沙汰なり、首を切るべきの由、山名これを
謝す。仍って無為に属すとうんぬん。近日の
無道・濫吹、ただ山名に在るなり」

『建内記』

《大意》

山名宗全のやっていることはとんでもないこ
とである。將軍を補佐する管領・細川持之（勝
元の父）が宗全の家臣たちの勝手な振る舞い
を止めさせると使者を派遣して伝えるのだが、
宗全は家臣たちの横暴を止めようとしな

い。それで細川持之は立腹し、管領自らが山名を
討つと軍勢を準備していると、これを聞いた

宗全は家臣たちがやっていることは非常にけ
しからん、土倉に押し入ったような家臣の首
を切るので許して欲しいと、山名宗全が細川
持之に謝罪した。その結果、細川と山名は戦
うことは無くなった。最近の乱暴行為はみん
な山名が絡んでいる。

と建内記で万里小路時房は山名を批判しています。

更に嘉吉元年閏九月九日の条には、ようやく山名
宗全は播磨に出陣して行き、見事に赤松氏を討ち取
るのですが、赤松氏を倒したら倒したでまた問題が
起きます。

「山名右衛門佐持豊、播州に在り。濫吹・狼
戾（ろうれい）、以ての外なり。赤松を滅ばす
は我が功と称し、守護職を望み申し、裁許に
及ばざる時分なり。寺社・本所・武家の人々
の所領・年貢等を奪い取り、猛悪度なしとう
んぬん。彼もし守護に補さば、一国滅亡すべ
きかとうんぬん」

『建内記』

《大意》

山名宗全は赤松を倒しに播磨に下り、そのま
ま播磨に居座ってしまい都に戻らず、播磨で

横暴なことを行っている。赤松を滅ぼしたのは宗全の手柄と言ひ、今まで赤松が務めていた播磨守護職を宗全が務めると好き勝手なことを言つて、播磨の寺社・公家・武士が持っている所領と年貢を奪い取るという悪行を行つており、宗全が播磨守護になつたら播磨は滅亡してしまふ。

と書いています。

次いで、嘉吉元年閏九月二十日の条には、山名宗全の播磨での横暴を止めるために、天皇に命令を出して貰うという案が出てくるのですが、しかし、これに対しては反対意見が出てきます。

「礼儀を存ずるの輩（管領・畠山の如しとうんぬん）は元来子細なし。濫吹を表すの輩は、縦い勅定と雖も、更に承引すべからず。然らば勅定かえつて軽きに似るか」

『建内記』

《大意》

礼儀をしつかりと知っている（細川持之や畠山持国のような）ちゃんとした武士はそもそも問題を起こさない。山名宗全のように勝手なことをする者は、仮に天皇が命令を出した

としても、従わないであろう。天皇が命令を出しても山名宗全が従わなかったとなると、天皇の權威に傷がつくことになるから、止めた方が良いでしょう。

との反対意見が出ています。

宗全の野心が応仁の乱を引き起こした。

応仁の乱の通説的理解

建内記からは、山名宗全というのはルール無視というのか、しきたりを重視しないイメージが非常に強かったことが分かるかと思ひます。そんな山名宗全が応仁の乱を引き起こしたというように言われています。

一般的に応仁の乱は足利將軍家の足利義視と足利義尚の家督争いと説明されます。当時の將軍は8代將軍の足利義政で、義政の奥さんが日野富子なのですが、この二人の間には男の子が出来ず跡継ぎが居なかった。そこで義政は出家して仏門に入っていた弟の義視に対して武士に戻つて、自分の跡を継いでくれないかと頼みます。

これに対して義視は最初断ります。何故かというのと義政も富子もまだ若いので、もしかしたらこの先、男の子が生まれるかも知れない。そうなつたら自分

応仁の乱の対立関係

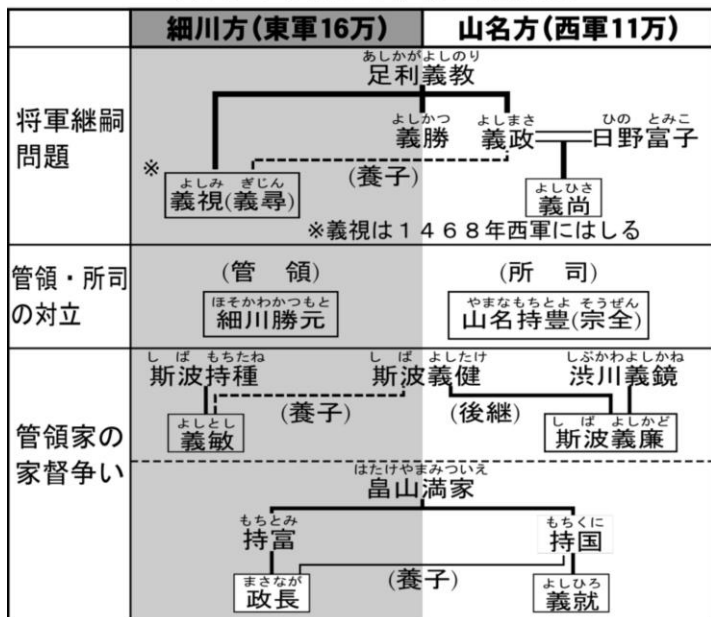


図3…応仁の乱の対立関係

が立場を失ってしまおうと、考えました。これに対して義政は、仮に男の子が生まれたとしても、その子はお寺に入れる。だからおまえ(義視)が絶対次の將軍だと説得するのです。しかし、これも結局口約束なのであまり当てにな

らないので、義政は当時の幕府の最大の実力者である細川勝元を義視の後見人に据えます。これで義視は勝元が味方になってくれるならば安心だと考え、武士に戻って義政の養子となるのです。

ところが義視が心配したように、義視が武士に戻った翌年には富子が男の子を生むのですが、それが後の足利義尚となります。

富子はお腹を痛めて産んだ義尚を次の將軍にしたいと願うけれど、それには義視が邪魔である。しかも義視のバックには細川勝元が居る。

じゃあどうするかというと、細川勝元に匹敵する実力者でありライバルの山名宗全に対して義尚の後見人になってくれるように頼む。

これを宗全が引き受け、結果として足利義視と足利義尚の足利將軍家のお家騒動に室町幕府の二大実力者である細川勝元と山名宗全が介入したという形となって応仁の乱へと発展していったというのが教科書などに載っている一般的な説明です。

ところが最近これは違うのではないかという話が出てくるのです。

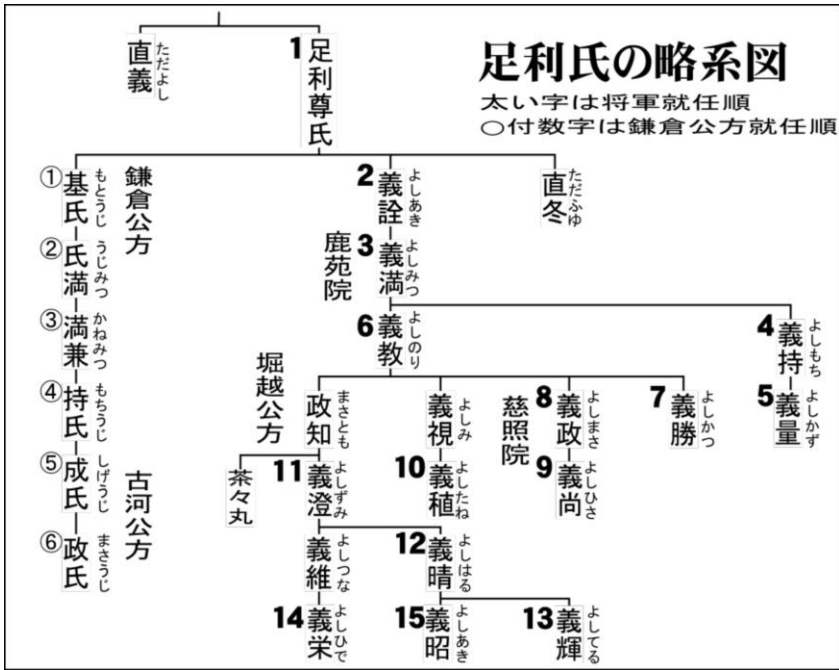
足利義視と足利義尚の関係

何処がおかしいかというと、一つは、果たして富子が義視を敵視していたかどうか疑問です。

何故かと言いますと、足利義視の奥さんは富子の

妹の良子なのです。つまり富子からみて義視は義理

図4…足利氏略系図



の弟という形になる。しかも、義視と富子の妹の結婚というのは、富子が反対していたら絶対に実現していない。つまり富子とその結婚を許可ないし支持したという事になる訳です。

義視と良子の結婚が成立したのは、丁度、富子が義尚を妊娠している時期なのです。当時の医学ですと男の子が産まれるか女の子が産まれるかは分からないのですが、男の子が生まれる可能性も有った。その状況下で自分の妹と義視を結婚させた。

そう考えると富子は義視を敵視していたとは到底考えることは出来ない。むしろ義視と仲良くしようと考えていたと思われる。

一般的には義視と義尚の間で將軍の地位を争ったと言われるのですが、これには簡単な解決策があるのです。ポイントが義尚がまだ産まれたばかりの赤ちゃんであるという点。

赤ちゃんであるから直ぐに將軍になることは不可能なことなので、解決策としては、

① 先ず義政が將軍の地位を義視に譲る。

② 義視は義尚が成人するまで將軍を務める。

③ その後、成人した義尚に將軍の地位を譲る。

つまり、義政→義視→義尚の形で將軍の地位を継承すれば、円く収まる。富子にしてみても義視は義理の弟なので、義尚が成人するまでの間、中継ぎで

將軍を務める案に反対する理由はない。

一般的には義政は銀閣に代表されるような文化・芸術には関心があるのだけれども、政治には全然興味がないというイメージが強く、政治なんてやりたくないから、まだ若い内から弟の義視を次の將軍にしようとした。というのが今までの一般的な理解ですが、これも最近はどうも違うのではないかと言われています。

つまり義政が將軍の地位を義視に譲ったとしても、義政は政治の実権は手放さない。

例えば、徳川家康は將軍の地位を息子の秀忠に譲りますが、家康はそれによって政治の世界から引退して政治権力を失ったかと言えば、そんな事は無く、將軍の地位を譲っても最高権力者は家康のままで大御所として政治を行う、いわゆる大御所政治と呼ばれるものです。

多分、義政も大御所政治のような形を目指したのではないかと思われる。義政は將軍の座を義視に譲ったとしても政治権力を手放す気持ちは全然無かった。と、すると将来、義視が將軍の地位を義尚に譲りたくない駄々をこねて話がつれることも考えにくい。義政―義視―義尚の流れで継承されていくことになる。

ただ、ここで話が少し厄介になることが起こる。

応仁の乱が起こる前年の文正元年（1466）の7月30日に富子の妹の良子が後の足利義植となる男の子を産みます。これも通説では、義植が産まれたことで日野富子は義視を警戒するようになったと言われる。つまり、義視は自分に男の子が出来たので、もし義視を將軍にしたら義尚に將軍の地位を譲らずに、自分の子の義植を將軍にしようとするのではないかと思い、富子が義視を敵視するようになったと一般に言われてきたのだが、これも多分違うだろうと近年は言われています。

何故かという、この時代、乳幼児というのは簡単に死んでしまう。足利將軍家という最上級の家でも同じことで、実際のところ、義政が何故將軍になれたかという義政には7代將軍となった義勝という兄がいたのですが、この人が10才で死んでしまった。

その結果として弟の義政が將軍となったという経緯があります。この他にも義政には多くの兄弟がいたのだが、若死にせず長生きできたのは、義政と義視と政知の三人だけで、他は幼くして亡くなってしまっている。

なので、そのような状況を考えたと義尚が確実に成人するかどうかは分からない。もし義尚が成長できずに死んでしまった場合、富子にとって誰が次の

將軍になるのが望ましいかという、義理の弟である義視もしくは、甥っ子である義植です。何故なら自分に近い親戚だから。

それ以外の人が將軍になってしまうと、富子にとっては全然関係の無い人が將軍になってしまい都合が悪くなってしまふ。なので、この時点でも富子は義視と仲良くしようと考えていた筈です。

文正の政変

ただ、富子はそう考えていたとしても、全く違う考えの人も居ました。それが伊勢貞親という人。足利義政の側近で、義尚の養育係でもあった。この人は足利義政と義尚とは親しいが、義視とは何の関係も無い。義視がもし將軍になってしまったら伊勢貞親は権力を失ってしまう可能性がある。そこで伊勢貞親は目障りな義視を排除しようと考え、文正元年（1466）9月5日の夜に、足利義政に対して義視が謀反を起こそうとしていると讒言するのですが、義政はお気に入り伊勢貞親の言葉を簡単に信じてしまい、弟の義視を殺そうとします。

義視は幕府の実力者に助けを求め、最初は山名宗全に、その後、細川勝元の元に助けを求めた。その結果、山名宗全・細川勝元、更には他の諸大名が一致団結して、足利義政に抗議することとなる。

その抗議の内容は、足利義視が謀反を起こそうと

しているというのは、伊勢貞親のでっち上げであり、義視は悪くない。悪いのは伊勢貞親であるから、貞親たちを追放してくれと諸大名が義政に申し出る。

諸大名が一致団結して抗議してくると將軍である義政もそれをはね除けることが出来ず、しかたなく伊勢貞親ら側近を追放した。

伊勢貞親・季瓊真薬（きけい しんずい）・斯波義敏・赤松政則ら義政の側近たちが失脚し、これが文正の政変と言われる事件で、これが応仁の乱の引き金になっている訳です。

義政の側近たちが皆失脚してどうなったかというと、義視が細川勝元の邸に入り事実上の將軍となる。山名宗全と細川勝元の二大大名が大名頭（たいめいのとう）として義視を支える暫定政権が成立することになる。

この事態は宗全にとつては、幕府内で権力を拡大する大チャンスなのです。何故かと言えば、乱暴な山名宗全は義政から嫌われて仲が良くなかった。義政の側近連中とも対立していた。そんな中で義政の側近達が皆失脚したことで、宗全にしてみれば自分の権力を拡大させるチャンスが巡って来たわけです。そこで宗全は、義政の側近を失脚させた勢いで、一気に義政も將軍引退に追い込み義視を將軍にすることで、自らの権力拡大を目論んだ。

ところがこれが上手く行かなかった。

細川勝元が、側近が失脚して將軍をやる氣を失っていた義政と諸大名を説得して、義政にもう少し將軍を続けてくれと頼み、將軍を続投することとなった。失脚した側近に代わって、義政は誰を頼ったかという、細川勝元と勝元と親しい畠山政長を頼った。当時、畠山政長が幕府のナンバー2である管領を務め、その政長と勝元が義政を支える形の政權となった。

山名宗全としては文正の政変で義政の側近達が居なくなった事により、これで宗全中心の時代が巡って来ると思ったのだが、結局は細川勝元と畠山政長が中心となり、宗全は再び2番手3番手の立場となつてしまった。これでは宗全としては面白くない。

宗全と勝元と言えば宿命のライバルのように言われますが、実はこの二人は割と仲が良かった。勝元の奥さんは宗全の養女で、宗全は勝元の義理の父にあたるのだが、この辺りから軋みが出てくる。

先程、赤松を滅ぼしたのが山名宗全とお話ししましたが、その後、赤松家の生き残りがお家再興を願ひ出て、結局赤松家というのが復活するのですが、その復活に手を貸したのが細川勝元なのです。

細川勝元以前から、元々、細川家と赤松家は仲が良かったので、勝元は赤松のお家再興を後押しした

のですが、宗全から見れば赤松氏は最大の敵であり、赤松もまた赤松家を滅ぼした山名宗全のことを相当恨んでいる。

最大の敵である赤松家を再興させることは、宗全にとつては最悪の事態なので、それを勝元が後押しした事に宗全は相当な不信感を抱いていたのです。

更に義政を隠居させ義視を將軍としようとしているところを義政の將軍続投という形で、それを阻止され、宗全からしてみると勝元が自分の邪魔・妨害をしているように映り、勝元が自分を政權から排除しようとしているように考えてしまい、尋常な方法では権力の座につくことは不可能と判断し、ここで宗全はクーデターに打って出るのです。

山名宗全のクーデター

クーデターを起こすと言っても、細川勝元と畠山政長は固く手を組んでいるのに対して、宗全側は娘婿の斯波義廉を味方に引き入れるが、義廉だけでは心細いので、そこで畠山義就（よしひろ）に目をつける。

畠山義就は畠山政長との間で、畠山家の家督をめぐって争っていたのですが、この時点では將軍・義政は畠山政長の方を正式な畠山家の家督と認めていた。なので、その取り決めに反抗する畠山義就というのは幕府に反抗する反逆者という事になり、幕府

は義就討伐の軍を派遣しました。畠山義就は非常に強い武將で、幕府が大軍を送って攻めているのになかなか倒すことが出来ずにいた。

宗全は、この最強の武將である義就を味方につければ、宗全側の方が、細川勝元・畠山政長よりも勢力にまさり、その軍勢力を背景として義政に圧力をかけ、將軍引退へと追い込めば良いと考えた。

文正元年（1466）12月26日に宗全の呼び掛けに応じて、畠山義就が大軍を率いて京都に入り、千本釈迦堂（大報恩寺）に陣を構えます。この状況を見て義政は山名の方が有利だと判断をします。

もともと義政という人は、いつも勝ち馬に乗ろうとする人で、基本的に強い方の味方をする行動原理を取るのです。この状況において細川勝元・畠山政長の側から、山名宗全側に乗り換えるのです。

文正元年の12月末に義就がやって来て、翌文正2年（応仁元年・1467）正月6日に義政は畠山政長を管領から罷免し、更に畠山の邸を義就に引き渡せとの命令を出して、畠山の当主を政長から義就に切り替える事をする。しかも、正月8日には畠山政長に替わって、山名宗全の娘婿である斯波義廉が管領に就任する。

これによって、畠山政長は管領の座を追われ、山名方が政権を掌握する状況となる。さらにこの最中

に、足利義視の官位が正二位権大納言へと上がり、武士では義視より官位が上なのは従一位左大臣の義政だけという状況になる。義政の従一位左大臣と義視の正二位権大納言では官位の差はほとんど無く、これは事実上、義政がもうすぐ出家し引退して、義視が將軍となる布石で義視の將軍就任は時間の問題という状況となった。

義視が將軍になって、宗全の娘婿の斯波義廉が管領ということになれば、これは事実上山名宗全が幕府を牛耳る山名宗全政権が出来たのと同じことになる。

一方、細川勝元はこの状況を看過する訳にいかず、軍勢を率いて義政の將軍御所に押し掛けて、畠山に關する命令を撤回するよう義政に詰め寄



図5：関係箇所との位置関係

ろうとします。ところが、勝元の奥方は宗全の養女なので、この計画を実家の山名方に知らしてしまふ。

その為、宗全たちは事前に將軍御所を警護するという名目で將軍御所を占領し、細川勝元等の計画は失敗に終わる。次に勝元たちは義政を山名側にとられたのならば、義視を取りに行こうとするのだが、これも宗全に先手を取られて、義視も將軍御所へと連れていかれて、この計画も失敗してしまふ。

恐らく宗全はこれで決着が着くと考えていた。つまり今までのケースだと失脚した人は大人しく京都から出ていくのが普通だった。畠山政長も京都から居なくなると考えるだろうと考えたのだが、政長は京都に留まり徹底抗戦の構えを見せます。

御霊合戦

文正2年（1467）正月18日に政長は邸に火をつけて北上し、京を出ていくように見せかけ、賀茂川と高野川の合流地点である糺河原から西に向かって上御霊社（御霊神社）に陣を張った。

当時は上御霊社と相国寺は隣接していて、相国寺の向かいが宗全達の立てこもる將軍御所（花の御所）なので、上御霊社に布陣するということは、要するに將軍御所を攻撃する構えを意味します。

洛中洛外図屏風（図6）にもあるように、屏風の右下の神社が上御霊社、隣の朱塗りの建物相国寺、

その左側の立派なお屋敷が將軍御所というように、三つの建物は隣り合っている地理関係になります。

畠山政長は將軍御所の攻撃を考え、盟友の細川勝元は將軍御所の西側に布陣する。勝元の盟友・京極持清は將軍御所の南に布陣し、將軍御所を包囲する形を取り將軍御所に立てこもる山名宗全達を攻撃しようとする作戦であった。

しかし將軍御所を攻撃されると足利義政も戦に巻き込まれる事となるので、義政は山名細川両名に対して、今回の騒動は畠山政長と畠山義就の二人の間の争いであるから、他の大名はこの争いに加わってはならず、政長と義就が一对一で戦うように命令をだします。

そして18日の夕刻に義就が政長を攻めます。こ

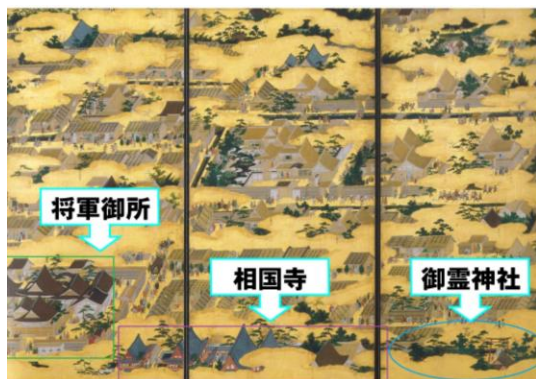


図6：洛中洛外図屏風

の時に細川勝元は將軍の命令に従つて政長に加勢しませんでした。山名宗全と斯波義廉は義就に加勢しました。その当然の結果として、義就が勝つて、政長が敗れ勝元の邸に逃げ込む。これが御霊合戦と言われる戦いで、ここから応仁の乱が始まったとも言えます。

以上の経緯を見ていると宗全の勢力が勝利を収めたと言えますが、ここで宗全は一つ失敗をおかします。それは畠山政長が勝元邸に逃げ込んだので、政長を拘束（殺害）出来なかった。ここで政長を仕留めておけば、畠山の家督争いはこれで決着が付き、争いが長引くことは無かつたのです。

応仁の乱へ

さらに山名宗全の誤算は、細川勝元を少しなめていたところがあつて、自分達が御霊合戦で勝つて政権を押さえれば、勝元は諦めるだろうと宗全は考えていた。確かに勝元は和歌にも精通する貴族的な大人しい教養人ですが、勝元も武士である以上、プライドもあります。

宗全は御霊合戦で義就に味方しましたが、勝元は將軍の命に従い政長に加勢しませんでした。この事が結果的に、勝元が盟友・政長を見捨てた形となり、世間からは「それでも武士か」、「腰抜け」といった悪評が立ち、武士としての面子が丸潰れとなりました。

た。

勝元は自らの武士としての名誉を回復させる為にも、失脚した政長を助けて反撃を計画します。

宗全達が戦勝に浮かれています間に密かに京都に兵を集めて、5月26日に細川派の武士達が將軍御所の向かいにあった一色義直の邸を攻めて、そこから応仁の乱がスタートします。

宗全側は御霊合戦での勝利で油断し兵は手薄でしたが、勝元側は反撃のために入念に兵を準備していたので、応仁の乱の始まった当初は、勝元等の東軍の方が圧倒的に有利でした。

山名宗全の実像

山名宗全の守旧性

ここまでは、応仁の乱がどのような形で引き起こされたのかをお話してきましたが、結局、山名宗全が応仁の乱を引き起こしたという側面が非常に強いのですが、宗全は別に全面戦争がやりたかつた訳ではなかつたのです。

本来は合戦などせず無血クーデターで、自分達の軍勢力を背景に將軍を脅して政権の主導権を握ることを考えていた。

しかし、山名宗全が応仁の乱の元凶と言われてしまふのは、山名宗全のイメージが、昔からのルール

やしきたりを無視する乱暴な人だというイメージが非常に強いので、そのせいで応仁の乱の首謀者のように言われてしまいやすい。

実際のところ、宗全は応仁の乱という大戦争をやるという気は全くなかった。そう考えると宗全がルール無視・しきたり軽視の乱暴者という従来のイメージが果たして正しいものなのか？と疑問が出てきます。

そういう目で宗全を見直してみると、意外としきたりを重視してきた面が見えてくるのです。

例えば先程、斯波義廉を管領にするという話がありましたが、それまで畠山政長が管領を務めていたのですが、無血クーデターによって政長から娘婿の斯波義廉に管領を挿げ替えたと話しました。何でもこんなことをやったかという、將軍を補佐する管領は誰でもなれるものでは無く、畠山家・細川家・斯波家の三家の中から管領を選ぶというしきたりがあり山名家からは管領になれなかった。なので、自分の代わりに娘婿である斯波義廉を管領として、宗全が幕府の実権を握ろうと考えた。

非常に筋を通した考え方ですが、何でもそんなにルールを守る必要があるのだろうかとか考えることも出来る。しきたり軽視の宗全なら宗全自身が管領になることを考えても良さそうですが、幕府の管領は三

管領家（畠山・細川・斯波）から出なくてはいけないから、娘婿である斯波義廉を管領とした。

そういう意味では、クーデターを引き起こした強引な人物ではあるけども、管領は三管領家から出すというしきたりは、しっかりと守っている。

また、宗全は応仁の乱の西軍の総大将といわれるのですが、宗全が単独で西軍を代表して命令を出しているかと言えば、実はそうでも無い。西軍は諸大名連名で命令を出しています。

西軍は管領の斯波義廉・畠山義就・山名宗全・一色義直・畠山義統・山名教之・山名政清・土岐成頼のこの8名の連名で命令を出しています。ここで面白いのは、西軍には最有力の大名である大内政弘がいますが、命令の連名には名を連ねていないのです。これは大内の幕府内での家格が低いから、名前を外されていると考えられます。

命令書の署名の順番にもあるように、管領である斯波義廉を筆頭に、三管領家の一つである畠山義就、次に四職家である山名宗全・一色義直が続き、畠山分家の畠山義統、山名分家の山名教之・政清、最後に四職家に準じる土岐成頼と言った具合に家格順に並んでいる。大勢力を有する大内政弘であっても、土岐氏よりも幕府内の家格が低くて名前を書くこともできないのです。

この順番は宗全が考えて命令書を出しているのだから、そうなると山名宗全というのは物凄く家柄に拘りを持っている。家柄の良い斯波義廉が筆頭で署名し、家柄の低い大内は署名に加わるべきで無いというように考えていたようで、しきたりとか家柄を重視していたと思われる。

山名宗全の都市性

山名宗全はしきたりやルールを無視して暴れ回る田舎者のようなイメージがありますが、基本的に宗全というのは、人生の多くの部分を京都で過ごした洗練された都会人と言えます。

例えば文安元年（1444）5月26日〜28日には山名氏の京都での菩提寺である梅津・長福寺の来迎堂を造立するにあたり資金が必要なので、土御門河原で勸進猿楽を催し、その収益でお堂を造営しようとした。この時に宗全は『建内記』で宗全の乱暴狼藉を非難していた万里小路時房を棧敷に招待もしています。

また、文安4年（1447）8月19日には細川勝元を招いて、猿楽と山名家のお家芸である犬追物でもてなし、文安6年（1449）閏10月5日には今度は宗全が勝元邸に招かれ犬追物を見えます。

さらに宗全は連歌にも関心が深く、応仁の乱当時、連歌の名手7人を連歌七賢と言ったのですが、七賢

のうち高山宗砌は山名家の家臣である高山氏出身で宗全とも親しかったのです。

享徳3年（1454）12月に将軍・足利義政から宗全が隠居を命じられ、都を離れて但馬に下向していた時も、宗砌は但馬について行き翌年但馬で没しています。それほど連歌の名人とも親交が深かったのです。

宗全は古いしきたりを破る変革者のイメージが強いですが、実は結構教養もあって、都市での文化的な生活を送っていたが故に、古いしきたりに縛られる側面もあったと考えられます。

和睦交渉と山名宗全

山名宗全はなぜ和睦を模索したのか？

応仁の乱というのは不思議なことに、東軍の総大将・細川勝元と西軍の総大将・山名宗全の二人が事実上、応仁の乱を始めたのですが、始めたこの二人が途中で乱に嫌気がさし、乱を止めたいと言い出すのです。

何で山名宗全は和睦しようと考えたのかというと、これは赤松氏問題との関わりが非常に大きいようです。

赤松氏が持っていた旧領国は播磨・美作・備前で、嘉吉の乱で謀反を起こした時に山名宗全が赤松氏を

滅ぼして、赤松が持っていた三カ国を宗全が手に入れています。

その後、赤松氏は長祿元年（1457）に後南朝に奪われていた神璽を取り返したことで、赤松政則がお家再興を許され、加賀半国の守護として復活します。しかし赤松氏としては出来れば本貫地である播州に戻りたいのですが、そんな最中に応仁の乱が起きた。宗全と対立する赤松政則は当然、細川の東軍に属します。

東軍について赤松政則は播磨・美作・備前の三カ国を山名宗全から奪い返すという動きを見せます。

応仁の乱は応仁元年（1467）に勃発するのですが、応仁2年の後半の時点では東軍の赤松政則が山名一族から播磨・美作・備前の旧領国三カ国をほぼ取り戻す状況となる。

つまり山名宗全にしてみれば、幕府の実権を握るために応仁の乱を仕掛けたのですが、いざ乱が本格的になると幕府の権力を握るところか、播磨・美作・備前の三カ国を赤松に取られてしまつて、宗全は大損をしている訳です。

更に西軍の朝倉孝景が東軍に寝返り、文明3年（1471）8月24日には甲斐氏と戦い大勝利をおさめるなど、この頃になると、赤松対山名だと赤松が有利となり、東軍と西軍では東軍が徐々に優勢にな

つて来ます。

更に山名に関しては文明3年9月に伯耆守護の山名豊之が家臣によつて殺害され、同年の11月には因幡守護の山名豊氏が戦死し、その子息が東軍に寝返つてしまい、文明3年の頃には山名一族が壊滅的な状況となつてしまっています。

実は文明4年（1472）の正月に“山名宗全が東軍に降参する”という噂が広がる。おそらく宗全はこの辺りから和睦のことを真剣に考え始めた。それは山名一族が危機的な状況におかれつつあつて、応仁の乱を早期収拾する必要があつたからです。

文明4年2月に宗全は西軍の諸将に東軍との和睦を提案しますが、この時は上手くまとまりませんでした。文明4年3月には、細川方から動きがあり、養嗣子の細川勝之を廃嫡にして、勝元の息子で宗全の孫（母は宗全の養女）でもある細川政元を後継者と決定します。この事は勝元から宗全への関係修復を希望するメッセージと考えることが出来ます。

山名宗全の切腹未遂事件

このような動きがあるなかで、文明4年5月に山名宗全は切腹を図ろうとしますが、家臣に押し止められて未遂となります。同年8月には山名家の家督を孫の政豊に譲ります。宗全の嫡子は教豊でしたが応仁元年（1467）に戦死し、その弟の是豊は宗

全と不仲で東軍に寝返っていて、後継者は教豊の子である孫の政豊だったのです。

宗全が切腹しようとするとか、家督を政豊に譲るということは、従来の説では細川方に和睦を希望するメッセージで有ったと言われて来たのですが、最近とは異なる説が言われるようになってきました。

つまり、和睦交渉が上手く行かなかったことの責任を取ろうとしたのではないかと、という説です。

どういふことかというところ、応仁の乱は山名宗全が政治的主導権を握ろうとして引き起こした争いという側面がありますが、他の山名一族の者にとつては応仁の乱はやりたかつた戦いでは無い。しかも結果的に、赤松の旧領三か国（播磨・美作・備前）を赤松に取り返されてしまい、山名一族としては大失敗・大損をしており、宗全に対する山名一族内の不満も高まって来ます。

そこで宗全は和睦交渉の場で、東軍と外交交渉して三か国のうちで一か国でも、国を取り戻すことが出来ないかと考えた。

細川は和睦しても良いかと考えたが、実力で旧領を奪い返した赤松政則は講和交渉で再び領国を奪われることに強硬に反対をして、和睦はまとまらなかった。

宗全は最後の手段としていた和睦交渉・外交交渉

によつても、奪われた領国を取り戻すことも出来ず、山名一族に対して責任をとる形で切腹を試みのだが未遂に終わり、切腹が上手く行かなかつたので、孫に家督を譲り隠居する道を考えたのではないかと、という説が最近提起されています。

この新説が正しいかどうかは微妙なところですが、少なくとも赤松問題が最大の問題であつたことは間違いない。結局、赤松旧領の三か国（播磨・美作・備前）を赤松に取られたことが、宗全にとつては大失敗で、これにより応仁の乱を止める方向に動いたことは間違いない。

宗全が隠居した翌年の文明5年（1473）に山名宗全と細川勝元は相次いで病死してしまい、宗全の後継者で孫の山名政豊と、勝元の後継者で息子の細川政元が和睦をします。

普通に考えると、西軍の総大将は山名で、東軍の総大将は細川なので、その山名と細川が和睦したならば、西軍と東軍が和睦して応仁の乱は終わりとなる筈ですが、そうはならず、他の西軍の諸将は戦いを続け、結局、山名一族だけが東軍に降伏する形となります。

以降は、西軍は大内政弘や畠山義就を中心として文明9年（1477）まで、応仁の乱は続いてしま

います。

以上、お話ししましたように山名宗全というのは非常に乱暴者というか、良く言えば、旧来の秩序を壊して新しいものを生み出す変革者というようなイメージが非常に強いと思うのですが、実際は室町幕府の旧来のしきたりや秩序を重んじる側面も持ち合わせていました。

だからこそ全面戦争ではなく、短期的に決着がつくつもりでクーデターを仕掛けたのですが、様々な誤算によって応仁の乱という大規模で長期的な戦いに発展していった。

それは宗全にとっては、全く想定していなかったことであるが故に、宗全は応仁の乱が始まってからは、むしろ混乱している感じが強い。宗全にしてみれば、何故このような大事になってしまったのかと戸惑っているのが、実態に近いのではないかと思います。

その点、畠山義就などは、応仁の乱のような大戦争になったことが楽しくて仕方がないといった感じですが、宗全はそんなことは全く望んでいなかったのです。

山名一族会の講演で申し上げるのは何ですが、宗全は応仁の乱が進めば進むほどに、行動は精彩を欠

いているように見受けられます。

今までの山名宗全のイメージは、後世の想像で描かれていた部分が結構大きいので、そこを見つめ直すと別の宗全像が見えてくるのではないかと思います。

長時間ご清聴ありがとうございました。



歴史講演会会場の様子
(H29/11/26 西陣織会館)

質疑応答

「応仁の乱」の歴史的意義について

山名一族会の会員の山名と申します。講演の内容に沿って2点ほど、質問をさせていただきます。

先ず1つ目は、鎌倉幕府以降、江戸幕府が倒れるまで武家政権が続くのですが、その中で起こった応仁の乱。京都の人は「先の戦争」と言えば応仁の乱を指すのですが、その応仁の乱の歴史的な意義というのは、どのようなものかご説明ください。

2つ目は、宗全の都市性と仰いました。宗全は都会人的なセンスを持った人物と感じたのですが、応仁の乱に入った以降はどのように変化したか？

質問への応答

応仁の乱の一番大きな歴史的な意義については、平安京以来、日本の政治は京都を中心に動いて来ました。鎌倉幕府が出来ますが、しかし基本的には京都が政治の中心。ついで室町幕府は京都に置かれ、引き続き政治の中心は京都にあり、京都には政治的求心力が何百年と続いてあったのだが、それが応仁の乱で解体している。つまり、京都中心のものが

本日、山名宗全が生涯のほとんどを京都で過ごしたとお話しましたが、細川勝元にしても斯波一族にしても有力な大名たちは基本的に京都で生活していた。自分達の国は地方に有るのだが、自分の領国は家臣達に国の経営を任せていました。

大名達が京都に集まって何をしていたかと言えば、將軍と話し合って日本全国の政治を行っていたというのが、室町幕府の政治の仕組みです。ですから京都で意思決定をして、それを地方に押し付けて行くという政治の在り方でした。これが応仁の乱によって解体をして、大名や有力な武士たちは皆、自分の国・自分の領地に帰ってしまい京都から離れ、その結果生まれてきたのが戦国大名です。

戦国大名は前の時代の守護大名と違って彼らは基本的に自分の国にずっと居て、自分の国を治めるのですね。これは今風な言い方だと地方自治・地方分権の形になりますね。それは江戸時代になっても基本的にはそうで、幕藩体制下でも幕府は基本的には各藩の内政には介入しないのが原則。そういう意味では江戸時代も地方分権・地方自治の時代。

明治時代に入ってから中央集権となるのですが、それでも藩の枠組みというのは残っており今の時代でもその名残が各地にある。例えば一つの県に二つの空港があるのは、江戸時代は二つの藩に別れてい

たからとか、昔の藩の枠組みが影響しており、その源流を訪ねて行くとそこには応仁の乱がある。

応仁の乱から京都中心の政治秩序から地方分権・地方自治の流れに変わっていった。そこで日本の歴史が大きく転換したということが一つ言えると思えます。

宗全が乱に入ってから、どうだったか？ということですが、基本的に宗全の性格は変わっていないと思います。

宗全は応仁の乱が始まってからも余り京都から離れていないのです。先程、赤松が旧領三か国を奪還したと話しましたが、京都以外の地方にも応仁の乱の戦いは波及していくのですが、宗全たちのような大將級の人たちは旧来通り、基本的には京都にいて領国には家臣達を派遣して、それまでの生活様式を変えていない。

逆にそうであるが故に、応仁の乱の影響で社会が変わっていく中で変化に取り残されて、宗全たちのようなかつての大名たちは下克上によって倒されていくという側面があるように思えます。

「享徳の乱」との関係性について

応仁の乱が複雑な様相を呈した原因の一つに、関

東で長く続いた享徳の乱との関係を言われる研究者が最近おられますが、それについて先生はどのように思われますか。

質問への応答

最近、『享徳の乱』（講談社選書メチエ）という本も出ておりまして、呉座の本には関東の話が出ていないと、私の本のことと触れてあるのですが、『応仁の乱』（中公新書）で関東の事を書かなかったのは、そこを書いてしまうと只でさえ複雑な応仁の乱が、益々複雑になり意味が分からなくなりそうだったので省いた次第です。

関東の事が全く応仁の乱に関係が無いとは思ってはいませんが、ただ重要度という点で、関東の戦乱が直接に応仁の乱を導いたとは思えない、というのが私の理解です。関東での対立が応仁の乱に全く影響していない訳ではないのですが、それが根本要因ではないと私は判断して、本のなかではバツサリ省いてしまいました。

『義就』の読み方は「よしなり」か？「よしひろ」か？

名前の読み方の点ですが、私は畠山義就（よしな

り」と長いこと理解して来ましたが、最近では義就（よしひろ）と読む方が多いのですが何か理由があるのでしょうか？

質問への応答

昔は畠山義就（よしなり）と呼ぶのが一般的でしたが、割りと最近になって『東寺百合文書』の中に畠山義就について「よしひろ」と振り仮名を振ってある文書が出てきたのです。

ワザワザ振り仮名を振るということは、普通ではそう読まないから「よしひろ」と注記がされたのでしょう。そういう形で読み方が書かれた史料が出てきたので、学界では最近では義就Ⅱ「よしひろ」の読み方が定着してきました。

実際のところ、こんな形で読み方がハッキリ分かるケースというのは珍しい。当時の史料は基本的に漢字で書かれており、ワザワザ振り仮名を振ってくれるケースなどは余り無い。

そうすると、ある人の読み方について確定できるケースの方が少なく、多分こう読むのだろうというケースの方がほとんどです。義就については読み方を裏付ける史料が出てきたので、「よしひろ」と読んでも間違いは無いだろうと思われます。

東西両陣を渡り歩いた「足利義視」について

応仁の乱の中では、東軍に属していた足利義視が、いつの間にか西軍に乗り換えているという不思議なことが起きているのですが、どういった理由でそんなことになってしまったのでしょうか？

質問への応答

義視が西軍に移るのが応仁2年（1468）で、応仁の乱が始まった翌年になるのですが、従来の説だと、応仁の乱の勃発当時は、義視と勝元は仲が良く、宗全と富子の仲が良いと言われて来たのですが、それが翌年の応仁2年になると、義視が西軍に移り宗全と近づき、東軍の勝元と富子は近づいて、応仁の乱の初期と全く人物関係が入れ替わり、これが意味が分からないと従来から言われて来ていたのです。

一つ言えることは、そもそも義視と勝元は仲が良かった訳でも無く、富子と宗全も仲が良かった訳では無かったのでは？と最近では言われています。

応仁元年5月に細川勝元たちが反撃した時、東軍の勝元が將軍御所を包囲し、將軍・義政は東軍側につきましました。これは義政だけが東軍に入るのではな

く、日野富子も義尚も義親も皆將軍御所に住んでいるから、その人たちも自動的に東軍に入ることになる。

ですから義親は勝元と仲がよかったので東軍の総大将となったのではなく、自分が住んでいる將軍御所を押さえられたので、半ば強制的に東軍の総大将にさせられてしまったのです。

そういう状況なので義親はそんなに東軍に思い入れがある訳ではなくて、むしろ乱の前には山名宗全と仲が良く、伊勢貞親の讒言によって殺されそうになった時に義親が最初に助けを求めたのは山名宗全だった。

ただ、東軍の勝元が義親達の住んでいる將軍御所を包囲したので、義親は東軍につくしかなかったが、ところがその後、義政と義親の関係が悪くなつて行くと義親は居場所が無くなつてしまい、西軍に居場所を求めて行つたのです。

これは確かに大胆すぎるといえば大胆過ぎるのですが、元々東軍に思い入れが無かったので、あっさり西軍に移ることが出来るのだらうと考えられています。

戦国時代を導いた応仁の乱、政治と宗教

応仁の乱というのは学校でならつた事とは随分印

象が違ふなど本日感じたのですが、私は応仁の乱とは戦国時代の前哨戦であつたのではないかと思つていたのです。裏を返せば、変革者であらうが何であらうが、国を改めるといふ大義名分より、自分達の家の為に、個人の利益の為に、応仁の乱に限つたことではないが、我が欲望を満たすために行われて来て、それは現代の世でも同じこと。応仁の乱とは戦国時代の前哨戦という考え方は出来るのであろうか？

それと、呉座先生の『応仁の乱』では、興福寺の僧侶等が応仁の乱や政治の世界に関わりを持つとうとする。仏教の世界と政治の世界は全く別のものである筈なのに、仏教が政治の影に回つて糸を引いているように感じられて不思議に思える。

質問への応答

応仁の乱が戦国時代の前触れということについてですが、私の本『応仁の乱』（中公新書）の副題が「戦国時代を生んだ大乱」でありますように、応仁の乱が戦国時代の幕開け・前哨戦であるというご指摘はその通りかと思ひます。

そんな争いは個人のエゴによつて動いていくというのは、現代も正にその通りです。

私の書いた『応仁の乱』が何故売れたかと、よく

取材されるのですが、私自身もよく分からないのですが、応仁の乱のように個人のむき出しの欲望がぶつかり合って、訳が分からない方向に、誰も予想できない所に事態が及ぶというのが、現代に通じるところがあったのが、一つヒットの要因になったと考えています。

仏教と政治の関わりですが、我々のイメージとしては仏教・宗教と政治が何故関わるのか不思議ですが、中世においては宗教が政治に関わるのが普通なのです。

政治と宗教が密接に結び付いている時代が正に中世という時代です。逆にいうと政教一致的な構造を否定するところから近世社会が生まれてくるのです。

大雑把な言い方ですが、織田信長が何故、宗教勢力と戦ったかという点、信長が宗教嫌いだから戦ったのではなく、宗教勢力が政治の関わるのが許せないというのが信長の姿勢で、信仰のみの集団であれば比叡山でも本願寺でもキリスト教でも自由に信仰すれば良い、ただし政治に関わるのはダメだという立場でした。その流れを引き継いで江戸幕府が宗教統制を行いました。

江戸幕府は仏教が政治に関わることを完全に遮断しました。その為に仏教が政治的影響力を失い、そ

れが現在へと繋がっていて、現代では葬式仏教とも言われたりしますが、そういった特徴も政治権力を抜かれた仏教が江戸時代に発展させたものと見るこ
とが出来ます。

平成29年山名会歴史講演会（H29年11月26日）にて

呉座勇一先生プロフィール

1980年8月、東京生まれ。2003年、東京大学文学部卒業。2011年、同大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。同研究科研究員などを経て、2016年10月より国際日本文化研究センター助教。専門は日本中世史。

著書に『一揆の原理』（洋泉社）『戦争の日本中世史』（新潮選書・角川財団学芸賞受賞）『日本中世の領主一揆』（思文閣出版）『応仁の乱』（中公新書）。

「山名」7号の発行に關して

山名会では平成27年・28年・29年と3年にわたり総会行事の中で、一般公開の歴史講演会を行つて参りました。この歴史講演会の開催を通じて多くの方々に「山名氏の歴史」や「山名会の存在」に興味を持つて貰えることを期待しての講演会開催でした。（左表参照）

各歴史講演会での講演一覧。			
H 27	室町文化の歴史的意義	松本公一先生	
	京 応仁の乱の前と後	山本義典先生	
	於・池坊短大	参加者120名	
H 28	秀吉・家康期の山名禅高	伊藤真昭先生	
	於・華頂短大	参加者80名	
H 29	山名宗全の虚像と実像	呉座勇一先生	
	於・西陣織会館	参加者108名	

今回発行の山名7号では、平成27年～29年の歴史講演会での講演を掲載致しました。

各歴史講演会では、講演会場になじみ深い先生や時節の話題に通じた講師方をお招きして、多くの方々と共に聴講していただけるように準備致しました。振り返って見ますと、各講演会共に80～120名の参加者を得ることが出来、この歴史

講演会への参加を切欠に山名会への入会をなされた会員さんも幾人か居られます。山名会の存在周知と会員確保の点から見ると得るところの多い歴史講演会であつたかと思ひます。

何れの講演も興味深い内容のものばかりで、これらが小冊子とはいえ一冊の本に集約できることは山名会員にとつては貴重な参考書になるかと思ひます。

また、日本中世史に興味を持たれている方々にも、面白く読んでいただける一冊かと思ひます。まずは気軽に頁をめくつて下さい。

平成27年～30年の山名会総会の概要 報告

平成27年度

平成27年の総会・歴史講演会は京都市・池坊短大「心ホール」を会場として、『京の歴史と山名氏』というテーマで実施しました。

講演会では、松本教授（文化史学専門）に、「室町文化の歴史的意義」を、山本代表（企画事務所主宰）には「京 応仁の乱の前と後」をご講演いただきました。各講師独自の視点から山名氏が六分一殿と呼ばれていた頃の「室町時代の文化」や「京の町の変遷」について語っていただき、そこに山名氏がどの

ように関わっていたか、お教えいただき
ました。

講演会の最後は、
西陣ゆかりの千本六
斉会による六斎念仏
をアトラクションと
して披露頂きました。
大神楽のようなスリ
リングな演技に思わ
ず手に汗を握りなが
ら拝見しました。

一般の方々も対象

にした歴史講演会でしたので、広報ポスターを作成
して、会員の関係各所に掲示願ったり、京都の地元
紙でも講演会の紹介記事を書いて貰うなど広報に励
んだお陰で、120名もの参加をいただき賑やかに
実施することが出来ました。

平成28年度

平成28年の歴史講演会は会場を浄土宗の本山・
知恩院門前の華頂大学「華頂ホール」を会場とし
て、テーマを『京の地と山名氏』として実施しま
した。

今回も講演は2題お願いし、華頂短大の伊藤教



池坊短大「心ホール」で実施

授には「秀吉・家康期の山
名禅高」と言うご講演と、
もう一題はガラスと雰囲気
を変えて、日本南画院会長の
町田先生に「南画の楽し
み方」をお話いただきました。
た。

今回も地元紙での紹介記
事やポスターを作って文化
歴史関係の史料館などでの
掲示をお願いして、80名程
の参加をいただきました。

平成29年度

平成29年は西暦では2017年で応仁の乱が勃発
した応仁元年（1467）からは550年の節目に
あたり、雑誌や、テレビ番組では度々「応仁の乱」
が取り上げられる等チョットした「応仁の乱ブーム」
が起きていたようです。

山名会歴史講演会では、応仁の乱から550年の
この年に新書『応仁の乱』を著され、応仁の乱ブー
ムを後押しされた呉座勇一先生に、講演を引き受け
ていただきました。

講演会の会場は、山名宗全邸跡から程近い所に建
つ西陣織会館。正に京都西陣の中心地で、応仁の乱



会場となった「華頂大学」

について、山名についてお話し頂きました。

今回も各方面からのご協力に加えて呉座先生のネームバリューも有って108名と、大人数で行うことが叶いました。

平成30年度

平成30年の山名会総会では、歴史講演会中心の形式は一旦お休みとして、久々に史跡探訪を主とした旧来の形で11月10日～11日の日程で行いました。1日目は山名氏発祥の地である群馬県高崎市で山名八幡宮はじめ山名氏関連の史跡や神社。2日目は山名氏の本家筋である新田氏や、太祖の兄弟筋にあたる得川（徳川）氏の史跡等を巡って参りました。

今後も総会での史跡散策や歴史講演会の開催を続けて参りたいと思います。会員以外の皆さんでも、山名会の催しにご興味が御座いましたら、気軽にご参加下さい。



会場の「西陣織会館」

編集後記

山名第7号の発行ですが、もう少し先に、先に・・・と先送りしている間に第6号から5年もの間隔が空いてしまいました。その間に平成から令和へと時代も移り変わってしまいました。

7号には平成の時代に開催しました歴史講演会の講演録を4本掲載しています。何れの講演も興味深い内容ばかりですので、じっくりと読んでいただければと思います。

お陰さまで会員登録数は60名を越えましたが、令和の新时代でも山名会として活動できますよう、新たな活動提案等、何か良いアイデアが有りましたら、ご意見いただけますようお願いします。

会誌「山名」第七号

令和2年5月1日発行

編集・発行 全国山名氏一族会

兵庫県美方郡香美町村岡区

村岡2365 山名氏史料館内

(事務局 吉川廣隆)

印刷 岩見印刷(株)

兵庫県豊岡市日高町土居67-1

表紙裏
空白ページ

